陰徳を積む

―安心立命の学―

非売品

陰徳を積む

―安心立命の学―

目次

(一) 安心立命の学 …… 5
(二) 安心立命の実践 …… 21
(三) 過失を改める方法 …… 28
イ、恥心を発すべし(恥を知るべきである) …… 28
ロ、畏心を発すべし …… 29
ハ、勇心を発すべし …… 31
(四) 過失を改める工夫 …… 32
イ、事上よりの工夫 …… 32
ロ、理上よりの工夫 …… 33
ハ、心上よりの工夫 …… 36
(五) 譲徳の効果 …… 80

陰徳を積む

（一）安心立命の学

私は幼いころ父を失い、その後、官吏になろうとして勉強していたところが、あるとき、年老いた母親は私に対し、「お前は官吏になる勉強をやめて、医者になる勉強をしたらどうか。医者になれば生計の道も立って、生命を養うこともできるし、また病める人や貧しい病人も救うことができる。しかも、この医術に熟練すれば、世間に名を成すような立派な医者になることができる。これはお前の父親の生前のかねてからの念願だったのだ」といわれたので、私も母の命令にしたがって医術を学ぶことにした。

ある日、私は慈雲寺において、一人の老人に出あった。その老人は、長いひげをはやして、立派な容貌をしており、飄々として、さながら仙人のようだったので、私は尊敬の念をいだいて挨拶をした。すると老人が私に話しかけて言うには、「君は官吏になるべき人である。来年は官吏登庸試験に合格できるのに、どうして官吏になる勉強をしないのか」と。そこで私は母

親に言われたことなどの経過を一部始終話した。

つぎに、老人の姓名と出身地を伺ってみた。その老人が言うには、「自分の姓は孔といい、雲南省の出身で、邵康節先生が著わした『皇極数正伝』（註1）を体得しているので、この易の真髄を、お前さんに伝えようと思っている」と。そこで自分は老人を家にお連れして、そのいきさつを母に話した。すると母は「いろいろお世話をしてよくつくしてあげなさい」と快く許してくれた。そこで老人を接待しながら、試みにいろいろと易で占っていただいたところ、ことごとく的中した。私は遂に来年の官吏の登庸試験に対して受験勉強をする気持になった。

そこで、この事を自分の表兄である沈氏に相談してみた。表兄が言うには、「自分の知人で郁海谷先生という人が沈友夫氏の家で私塾を開いているので、そこに寄宿して勉強すれば極めて便利であろう」と。そこで郁先生に師弟の礼をとって勉学に励むことになった。

ある日、孔老人は今後の私の運命を占って下さった。それによると、県の試験では第十四番目、府の試験では第七十二番目、道の試験では第九番目に合格するということであった。翌年、試験をうけたところ、三ヶ所の合格順位はみな老人の占ったとおりであった。

さらにまた孔老人は、私のために一生涯の運命を占って言うには、「某年には試験で第何番目で合格し、某年には官吏として俸給を受けるようになるであろう。某年には貢生(官吏の位)となるであろう。貢生となってのち、某年には四川省の長官に選ばれるであろう。そして在任三年半で休暇をもらって帰郷する。そうして五十三才の八月十四日の丑の刻に一生を終えるであろう。惜しいことに子供に恵まれないのである」ということであった。私はその一言一句をつぶさに記録し、謹んでこのことを記憶に留めるようにした。

その後、すべての試験にあうたびに、その順位は、前後すべて孔先生が予言した通りぴったり適中していた。ただ、「禄米九十一石五斗を戴いてから、はじめて貢生に選出される」と占ったのに、禄米七十二石になったとき、屠先生が貢生にすることに決裁したので、私はひそかに「孔老人の占いもあたらなくなったのでは？」と疑いを持ったのである。

ところが、そののち、はたしてある人の非難にあって取り止めとなり、そのまま丁卯の年になって殷秋溟先生が、私の試験の答案を見て感心して言うには、「この五篇の論文答案は、天子に奏上する論策に値するもので立派なものである。このようなすぐれた人材を、むざむざと

埋もれさせていいものであろうか」と。そこで県の役所から理由を具申して、貢生たることを許可するようにした。ここで前からの禄米を通算してみると、ちょうど九十一石五斗で、孔老人の占ったとおりであった。

私はこのことによって、「進んで仕官するにしても、退いて下野するにしても一定の運命があり、出世の遅いのも速いのも人力を越えた、定まっている時期というものがある」ということをますます信ずるようになり、心中淡々として運命にまかせて他に求めることがないようになった。

貢生となって北京に入り、都に一年滞在した。この間毎日朝から晩まで静坐をしていて、一切の書物や文字を見なかった。己巳の年に一旦帰郷し、さらに南京の大学に遊学し、まだ大学に行かない前に、まず雲谷禅師を棲霞山中に尋ね、一室の中に向い合って静坐をしておよそ三昼夜も眠らずにすわった。

その時、雲谷禅師が問うていわれるには、「およそ人が聖人となることができないのは、ただ妄念妄想にとらわれて、本来の清浄心を汚してしまうからである。ところが、お前さんは三日間も坐っていながら、妄念が一つも起きなかったが、それは何故であるのか」と。私はそれに答えて、「私は孔先生に運命を占ってもらって、人の一生というのは栄辱も死生も、みな定

まった運命があり、それを変えることはできず、いくら考えてみたところでなるようにしかならず、そこで何も考えないようになりました。したがって妄想しようとしても、妄想すべきものがありません」と。

雲谷禅師は笑いながら、「わしは、お前さんを期待してすぐれた豪傑であると思ったが、もともとただのつまらぬ凡人だった」と言われたので、私はそのわけを問いただした。すると禅師は、「人というものは、つねに妄念妄想に煩らわされて無心であることができないから、陰陽に束縛されてしまう。陰陽に束縛されるということは、とりもなおさず気数（運命）に束縛されるということで、気数に束縛されるものが、どうして気数（運命）がないと言えようか。この数は必ずあるといっても、ただし、それは凡人だけが数に束縛されるのであって、極善の人に対しては数も拘束することはできない。それは極善の人が本来、数（運命）の中で苦しみにあうとしても、彼は極めて大きな善事を為すので、この大善の功徳によって、苦しみの運命は楽しみに変り、貧賤短命の運命もみな富貴長寿に変えることができるからである。それを逆にいうと、極悪の人に対しても数は拘束することができない。それは極悪の人が本来、数（運命）の中では必ず福を受けるとしても、彼は極めて大きな悪事を為すので、この大悪の罪業によって、福は禍にかわり、富貴長寿も貧賤短命に変ってしまうのである。したがってこのよう

に極善、極悪の人はともに数の拘束を受けないのである。お前さんは二十年このかた、かの孔老人に占ってもらったままで、一寸一厘の違いもないということは、完全に気数（運命）に束縛されているのであって、なんとつまらぬ凡人ではなかろうか」といった。

そこでまた私は質問して、「それならば、運命というものは逃れることができるものですか」というと、雲谷禅師は、「運命は自分から作り、福は自分から求めるものである」（運命というのは決して一定したものではなく、みな自分から作り上げていくものである。自分から善事を為せば運命はよくなり、自分から悪事を為せば、運命は悪くなる。福もまた自分から求めるもので、自分から善事を為せば、本来福がないものでも福を授かるようになり、自分から悪事を為せば、本来福があってもその福を失ってしまう）とは、『詩経』や『書経』（註2）に言われているところで、まことに立派な教えである。わが仏教の経典の中にも、「『富貴を求めれば富貴が得られ、男の子なり、女の子なりを求むれば、男の子でも、女の子でも、どちらでも得られ、長寿を求めれば、長寿が得られる」（人というのはただ善根功徳を積みかさねていけば、運命といえどもその人を拘束することができなくなる。たとえば本来富貴に縁のない運命を持っていても、善根功徳を積むことによって富貴になることができ、本来子宝に恵まれない運命を持っていても、善根功徳を積むことによって子宝を得られ、本来短命の運命を持っていても、

善根功徳を積むことによって長寿を得ることができる）と説かれている。一体妄想（虚言）はお釈迦さんの大いに戒しめとするところであるから、諸々の仏や菩薩がどうして人を欺くようなことがあろうか」と答えた。

私は膝をのり出して、「孟子は、『求めれば得られるが、それは自分に在るものを求めるからである』（註3）と言っているけれども、道徳仁義のようなものは（自分の心の内にあるものだから）、努力することによって求めることができようが、功名富貴は（自分の外にあるものだから）、いくら努力しても、なかなか求めても得ることができないのである」と問い返した。

霊谷禅師はそれに答えて、「いや孟子の言うことは誤っていない。お前さんが自分から誤って解釈しているのだ。六祖慧能禅師の言葉の中にも、『すべての福田［福を生ずる田地、畑（註4）］は、みな各人の心の中にあり、心の外に別に福田があるものではない』とある。したがって福の種を植えるのも、禍の種を植えるのも、すべてが各人の自分の心にかかっている。そこでいかなることであっても、ただ自分の心中に求めていけば感応して通じないことはないのである。自分の内にある心に求めれば、ただ心中の道徳仁義を得られるばかりでなく、身外の功名富貴を求めずして自然に得られるので、内（心の中に本来備わっている道徳仁義）、外（自分以外にある功名富貴）ともに得られるのである。これが求めて得られ益となるのである。それ

にはやはり内にある心にすべてを求めていかなければならない。それを自分自身ふりかえってみて、わが身を反省することなく、従に外に向って功名富貴を求めようとしても、それを求めるには多くの苦難の過程があり、またそれを得られるもの（自分にすべて決定権があるもの）を求め、求めても得られないもの（自分に決定権がない）を妄りに求めてはならない。それをもしも無理に求めようとすれば、目的の為には手段を選ばずで、道にはずれたことまでして求めるようになるので、身外の功名富貴が得られないだけでなく、心中に本来具わっている道徳仁義の良心までも失ってしまい、内（道徳仁義）、外（功名富貴）ともに失ってしまう結果となる。故にこれを外に求めるということは益のないことであるというのが孟子の教えの真の意味である。ところで「孔先生はお前さんの一生をどのように占ったのか」と。そこで私はありのままを告げた。

雲谷禅師は私のありのままの話しを聞いて、『なるほど、それでお前さん自身で考えてみて、科挙の試験に及第することができるかどうか、子供に恵まれるかどうかわかるか」といわれたので、私は今までのことをややしばらく考えてみて、「私は試験に及第もできず、子供に恵まれることもありません。一体、試験に及第するような人は、大低福相がありますが、私には福が薄く、また善行功徳を積みかさねて、厚い福の基をつくることもできないし、その上、世上

のわずらわしいことには堪えられず、度量も狭く人を容れる寛容さもありません。時には自ら尊大ぶって、わが才能智慧でもって人をおさえることもあるし、あるいは慎思熟慮せず、思うままを直ちに言動にあらわすような直情径行であり、口も軽く冗談や妄言妄談が多く、すべてこれらはみな福に薄い相であります。それなのにどうして官吏登庸試験に合格し、高官になれましょうか。

土地の汚れて穢れているところは物を多く生じますが、水の清いところには常に魚は棲まないものです。私は余りにも潔癖すぎるものですから、人情にそむいているので、これが子供に恵まれない理由の一つです。また春のような温和の気は万物を成長させますが、私はよく怒る性質をもっていて温和の気に欠けています。これが子に恵まれない理由の二つ目です。仁愛というのは物を生々発育させるところの根本であり、残忍な心というのは物を害して生々発育させないところの根本である。残忍な心には慈悲心、すなわち仁の心がないからで、それは果物と同様に仁（さね）がなければどうして成長できるであろうか。私は名誉とか節操というものを惜しみ大切にして、常に自己の体面にとらわれ、自分を犠牲にして人を救うことができません。これが子に恵まれない理由の三つ目です。言葉が余りにも多すぎるとそれだけで気を消耗することになり、私は多くしゃべり過ぎるのでそれだけ元気をそこなわれ、体は自然に強健で

なくなる。これが子に恵まれない四つ目の理由です。人というのは精・気・神の三つのエネルギーによって生命を維持している。それが大酒を飲むことによって精と神を最も消耗することになるが、精気が不足してどうして子宝を得られるであろうか。これが子に恵まれない五つ目の理由です。私はまた徹夜長坐を好んで休養をとるということがなく、元気を保持し、精神を養うということを知りません。これが子に恵まれない六つ目の理由です。その他の過失はなお多く、ことごとく数えあげることもできません」と答えた。　すると雲谷禅師は、「それはただ科挙の試験ばかりとは限らぬ。世間で千万長者の富を得るものは、たしかに千万長者となるに値いする人物であり、百金の富を得るのは、たしかに百金に値いする人物である。餓死するようなものは当然餓死するに値いすべき人物であり、これらはすべて自分で作り上げたもので、天はそのものの本来の素質によって厚く遇するだけである。たとえば人が善根功徳を積むのは、あたかも天の温和の気と適度の雨露によって万物が生々発育するように、それは天の福を受けることが厚いのである。反対に人が悪事の非行を積みかさねていけば、天が大風や大雨によって万物をいためつけるように、天の禍（わざわい）を受けることが厚いのである。それは天がそのものの本来の素地（そじ）（心のはたらき）によって厚くするだけであって、わずかでも自分の意思を加えることは微塵もないのである。たとえば子供に恵まれる場合でも、植えた種の如何による。もし植

えた種子が厚ければ、結ばれた果実も実のり厚く、植えた種子が薄ければ、結ばれた果実も実のり薄いのである。このように百代にわたる程の厚い徳（種子）を積んだ人は、必ず百代まで続くところの子孫（果実）に恵まれて、その福徳を保つことができる。十代にわたる程の徳を積んだ人は、必ず十代まで続くところの子孫に恵まれてその福徳を保つことができる。三代二代にわたる徳を積んだ人は、必ず三代二代まで続くところの子孫に恵まれて、その福徳を保つことができる。これは当然の道理である。それが一代だけで断絶して後を継ぐべき子孫が断えてしまうのは、その徳が極めて薄いからである。それは恐らく日常徳を損じるような行為が多かったからであろう」。

「ところで、お前さんいまや既に自分の非をさとった。してみると、いままでは占いの通りだったが、今後はこれまで科挙の試験に合格できず、子供にも恵まれないという薄相（福徳が薄いこと）を真情を尽くして改めるべきであるが、それには務めて善徳を積み、務めて清濁あわせのむところの度量を持ち、務めてなごやかな和気をもち、務めて精神の消耗を惜しむべきである。このようにしていけば、これまでのいろいろなことは、たとえば昨日死んでしまったようにすべてを洗い流し、これからのいろいろなことは、今日新しく生まれ変ったようになる。これが〈義理再生の身〉というものである」。

「われわれの肉体にすら一定の数（運命）があるのだから、義理の身においても天命の制約を受けるのである。そこでどうして天に感応しないということがあろうか。『書経』の太甲篇に《天が降す災はなおさけることができるが、自分から作った禍は避けることができず、どうにもならない》といっている。また『詩経』で言うには《世間の人は自分自身に在るものを求めず、ただ外に在るものだけを求めている。神仏の加護ばかり祈願して自己の心霊の中にいる上帝（神仏）を体得認識しようとしない。そこで禍福はすべてが自分の心の中に求める》と。つまり孔先生がお前さんは科挙の試験に及第もできず、子供にも恵まれないということを占ったのは、これは『書経』でいう天の作せる災と同じであるので、やはり避けることができる。お前さんがいま徳分を十分に充し広め、善事を力行し、多くの陰徳を積んでいったならば、これこそ自分から作ったところの福である。どうしてこれを享受できないことがあろうか」。

「『易経』というものは君子のために、吉に趨き、凶を避けるように謀る教えである。もし天から授かった運命というものが一定して変らないものであれば、どうして吉に趨くことができようか。どうして凶を避けることができようか。そんなことはあり得ない。易の始めの第一義に、《善行を積み重ねた家には、必ず子孫にまで及ぶほどのあり余る恩沢があるのである》と言っている。お前さんはこの言葉が信じられるかどうか」と言われた。

私は禅師の言を信じ、慎んで教えを受け、よって仏前に往き、過去の罪を真情をつくして懺悔し、箇条書一通を作って、まず第一に科挙の試験に及第することを願い、善事三千条を行なって天地祖先の神々の徳に報いることを誓った。

この時雲谷禅師は、功過格（註5）一冊を取り出して私に示し、毎日自分の行なったことを書きつけ、善事であればその数を記し、悪事であるときには善事の数からその数を除去させるようにし、また、そのうえ準提咒（註6）を奉誦してその効果があることを、期待すべきだと教えてくれた。

更に私に告げて言うには、「御符（お札、お守り）などを書く専門家の家にはこのような格言がある。『御符を書く秘伝を知らなければ、鬼神に笑われる』と。これには秘伝があり、ただ、一念をも動かさないことである。筆を執って御符を書くにあたって、まず第一に世間のすべての因縁を放下し棄て去り、一点の雑念も起さず、この念が動かないようになって、はじめて最初の一点を書き下すのである。このことを「混沌開基」（混沌より基を開く）という。これによって一筆で書きあげて、その間に更に思慮をさしはさまなかったならば、この御符は霊験あらたかである。

孟子は立命の学を論じて『短命と長寿とを二つに区別しない（短命と長寿によって心を動か

されない)』と言っている。一体、短命と長寿とは、はっきりと二つのものである。しかし、その念を動かさない一念未生の時（無念無想の境地）には、一体どちらを短命とし、どちらを長寿とするのであろうか。細かにこれを分けて言えば、豊かで富むことも不遇で貧しいことも念を起さないときには二つのことではない(それらによって心をうごかされないこと)。それがわかってはじめて貧富の命を立てることができ、短命と長寿が二つのことではないことを悟って、はじめて死生の命を立てることができる。人というものはこの世に生れてきて、何が大切かと言って、死生ほど重要な問題はないのである。そこで孟子が『夭寿』（短命と長寿）と言ったことは、世の中すべて一切の順境と逆境をともにこの『夭寿』の中に包含しているのである。

さらに、『一身を修めてもって天命である夭寿を俟つ』と孟子は言っているが、ここに至ってはじめて徳を積み、天に祈ることになる。その修めるというのは、身に過悪のある場合、その欠点を取り除いてこれを治めるべきであり、俟つといっているのは、ほんのわずかほども分不相応な野心や希望を抱くことなく、すでに過ぎ去った過去の事や、まだ来ない将来のことに心をあれこれと煩わすことなく、すべてこれらを断絶してしまい、この境地に至って、塵程も心を動かさないならば、求めることはそのまま求めないことになり、人間欲望の世界を離れずに、そのままただちに先天の境地に至ることができる。これが実際の学問である。お前さんは

まだ無心になることができないから、ただ準提咒を誦えて、これを意識することなく、数えることなく、間断なく誦え、これが純粋に熟練してくると、誦えても誦えたことにならず、誦えなくても誦えたことになり、一念不動の境地に到達すれば、霊験あらたかである」と言われたのである。

（註1）『皇極数正伝』……宋代の易の学者、邵堯夫は蘇門山で刻苦精励、勉学をした。当時、共城の令（官の位）であった李之才が、この人を奇才と認め、『図書先天象数』の学を授けたところ、妙悟神契、自得する所が多かった。世情の変遷を研めること、あたかも手相を見るが如く一目瞭然であった。その著作『皇極経世書』が世間の人に尊重された。この書は『易経』の六十四卦を以て元会運世年月日辰に配分し、以て古今の治乱興亡の数（運命）が前以て定められているということを証明し、これを「皇極数」という。後世の易学の運命論的見解はここに端を発するといわれている。

（註2）『詩経』や『書経』……『詩経』に「天命常なし」とあり、『書経』に「上帝常ならず、善を為せばこれを百祥（多くの吉祥）を卸し、不善を為せばこれに百殃（多くのわざわい）

を下す」とあるによる。

（註3）孟子は、『求めれば得られるが、それは自分に在るものを求めるからである』……『孟子』に「求むれば則ちこれを得、舎つれば則ちこれを失う。これを求むるは得るに益あるなり。我に在る者を求むればなり。これを求むるに道あり、これを得るに命あり、これを求むるは得るに益なきなり、外に在る者を求むればなり」（求めれば得られるが、捨てておけば失われてしまうものがある。このものは、これを求めさえすれば、これを得られて、自分自身にとっても益となる。それは自分自身の中に在るもの［本来中に備わっている道徳仁義などの天爵を指している］を求めるからである。これに反し、これを求めるにしても、いろいろの手段方法があり、これを得るにしても天命というものがあり、また他人の多くの協力を必要としてたとえ求めてもなかなか得られず、それを求めてもし得られたとしても、自分自身にとって益とならない。それは自分自身の外に在るもの［功名富貴などの人爵を指している］を求めるからである）。その要旨は、人は自分自身の内にありて求めれば確実に得られ、而も益になる一番大切なものを捨てて顧みず、逆に自分自身の外にあるものを求めても得ることは難かしく、得たとしても益にはならず、しかもそれ程大切でないものを一生懸命に追い求めている。

（註4）福田……この田畑は有形の田植えや野菜を作る畑ではなくて、無形の心を指す。この心に功徳を積むという一念の種子があればそれは日ごとに成長して大きくなり、福もまたそれに相応して大きくなる。それはあたかも田畑の作物が成長するようなものである。

（註5）功過格……功過格とは雲谷禅師が伝えた善悪の基準、功格五十条、過格五十条からできており、善を功とし、悪を過とする。

（註6）準提呪……準提呪とは準提陀羅尼のこと。

（二）安心立命の実践

私は初め号（学者、文人、画家などが本名のほかにつける雅号）を「学海」（海に学ぶ）としていた。それは、「あらゆる川はすべて海にそそぎこんで大海となる」という意味でつけたのである。しかし、この日からは「了凡」と改めることにした。それは、「『立命の説』を悟っ

たのでいままでのような凡夫の次元には再び落ちまい」と思ったからである。それからは小心翼々（慎み深く細かい事にまで注意するようす）として恐れ慎んで戒め、従来のおおまかな態度と異なってきたことを自覚するようになったのである。従来はただあまり気を使わずに悠々と気ままにしていたが、「立命の説」を悟ってからは、自然に戦々恐々として恐れ慎むようになり、特に人の見ていない暗い部屋や奥まった所にいる時は、いつでも神仏が見ておられるように自覚され、そこで天地鬼神に恥るような想念や行いを慎むようになり、また、他人が私を憎み嫌っても平然として心安らかに受け流すことができるようになった。

翌年は郷試（三年ごとに各省で行う官吏登用試験）の年に当り、試験の規則によると先ず礼部に行って科挙の試験を受けなければならない。先に孔先生は私が第三位で合格すると占ったのに、何と今度は第一位に選ばれ、孔先生が先に占った言葉は当らなくなった。また孔先生は私が挙人に合格するとは占っていなかった。ところが何と秋の郷試では挙人に合格した。これらはすべて占ってもらった私の運命の中にはなかったことで、雲谷禅師が言われたように「運命にしばられることなく自から運命を造りあげることができる」ということを身を以て体験したのである。

しかしながら、私としてはたとえ当然為すべきことがあっても、それに全力投球することが

できず、自分の身を反省してみても過失が多く、また善を見てもこれを行う勇気がなく、或いは人を救うにも敢然として救うことができず常に心は躊躇して動揺しており、或いは身体では善事を行うが口を慎まないので常に過った事を言い、或いは酒を飲まないでいる時は常に慎んでいるが、ひとたび酒に酔えば傍若無人に振る舞い、過ちを犯すので折角の功徳や善行も帳消しになってしまい、毎日を空しくすごしていたのであった。このような状態であったので、己巳の歳に雲谷禅師の教訓を聞いて、三千の善行を立てる誓願を立ててから、己卯の歳になるまで約十余年を経て、ようやく三千の善行を達成することができたのである。

ちょうどそのときは李漸庵先生に従って関外より関内に返って来たばかりで、達成した三千の善行を神仏に報告することができなかった。

そこで翌年の庚辰の歳に南に還り、はじめて性空・慧空の両上人に願って東堂の禅堂において三千の善行を達成したという回向の儀式を行って、さらに子供にめぐまれるための願を起こし、また三千の善事を行なう誓願を立てた。そして翌辛己の歳に男の子の天啓を授かった。

私は善事を一つ行うごとにすぐに記録していった。お前（天啓・袁了凡先生の息子）の母は字が書けなかった。そこで善事を一つ行うたびに、すぐに筆を執って一つの赤丸印を暦の上につけて、目じるしにした。この善事とは、貧しい人に施したり、或いは生物を買って放してや

ったりして、多いときには一日のうちに十余りも赤丸を印すことがあった。癸未の歳の八月まで四年を経て、最初に願をたてた三千の善行の数に達することができた。そこで再び性空上人などにお願いして、家庭で回向した。

その年の九月十三日、進士の試験に及第することを求めるための願を起こして、善事一万条を行うことを誓った。丙戌の歳に試験に及第し、宝逞県の知事を命ぜられた。

私が宝逞県の知事の時に、まだ何も書いていない一冊の帳面を準備して、これを「治心篇」と名づけた。それは自分の心の中に悪い念が起ったり、或いはよくない事を為すのを恐れ慎しむため、行住座臥つねに注意して心をよく治めるようにしたのである。毎日、早朝に起きて役所の広間に坐り、事件を処理し、公務に勤務している時にも、それを肌身離さず机の上に置き、一日中自分の行った善悪はことごとくこの「治心篇」に書きつけ、夜になると机を庭に出して、衣冠束帯に身を正し、趙閲道の故事に効って、香を焚いて、天の神様に逐一その日のことを報告し、天帝に告げられないようなことはしないようにいましめた。

お前（天啓）の母が私の行う善事が数多くないのを見て、顔をしかめて言うには、「私が前に家に居った時は、お前と助けあって善事をなしたので、三千の数も完了することができました。ところがいま一万の誓願を立てたけれども、役所の中にいるために、人のために善いこと

を施すこともできません。してみると、何時になったら満願成就できるでしょうか」と。するとその夜、たまたま夢の中に神があらわれたので、私は、「一万の善事を達成することが難しい」と言った。すると神が言われるには、「もしお前のとりたてている年貢米を軽減してやったならば、全県の百姓はその恩恵をこうむり、一万の善行も一挙に達成させることができるであろう」ということであった。考えてみると宝逞県の田畑からは一畝ごとに二分三厘七毛の年貢米を取っていた。それでは百姓の負担が重すぎるので、全県の田地を整理区分して一分四厘六毛まで減らした。たしかにその事を実行はしたが、私の心中では夢の中の出来事を不思議に思い、またどうしてこの一事が一万の善行に相当するのか疑心暗鬼で不安に思っていた。ちょうどそのとき幻余禅師が五台山から来られたので、私は夢のことを話し、かつこのことを信ずべきことかどうかを尋ねてみた。

すると禅師が言うには、「その善心が真実からであるならば、一つの行いも万の善事に相当することができる。ましてや、全県下の年貢米を減らし農民の苦痛を軽減する恩恵においては、実に大変な福を受けることは疑う余地がないのである」と答えられた。そこで私は即刻自分で得たところの俸給をなげだして、五台山で一万人の僧に供養し、これを回向した。以前に孔先

生は私が五十三歳になると災難にあうと占ったが、私はいまだ長寿を天に祈ったことはなかった。それにもかかわらず、この五十三歳には何の災難もなくいまや六十九歳になった。『書経』で「天道の誠を行うのは人であり、人の運命というものは一定不変のものではない」といっているがこれらはみな人をあざむく言葉ではなく真実の言葉である。そこで私は「禍福はすべて自分からこれを求めるのであって、悪事を為せば禍いが来るし、善行を為せば福が来る」ということはみな聖人や賢人の格言であって、世俗でいう「禍福はみな天の支配するもので自分ではいかんともしがたい」というようなことは、取るに足りない俗人の考えであることを悟ったのである。

天啓（袁了凡先生の息子）よ、お前の運命がどのようであるかは、私は知らない。もし運命がお前を高位高官の栄誉をほしいままにできる地位に登らせてくれたなら、常に落ちぶれた時のことを思い起こして謙虚にしなさい。万事順調に思うがままに事がはこんでいる時は、常に逆境の時を思い出して自らを戒めるようにしなさい。もし、現在衣食が十分であるならば、常に貧乏のときを思い出して倹約しなさい。もし人びとに尊敬されるようになったならば、常に恐れ謹んで自らを戒めなさい。もし君の家が世間から人望が高くなったならば、常にへり下るべきである。もし学問が深くなり名声も高くなってきたならば、常に未熟な時を思い出して奢

ることのないようにすべきである。このように、みな現在の恵まれた境地に対して逆境に思いをいたし、つねに虚心になって自分の人格・道徳を磨くべきである。　遠くは先祖の徳をけがさないようにしてますますその名を揚げ輝かすようにし、近くは父母の至らないところを補うようにし、上は国家社会の恩恵に報いようとし、下は子孫に福を残すようにし、外に於いては他人の困難を救済することを考え、内に於いては自分の邪な念や妄念妄想をつとめてなくすようにし、それによって自分の至らないところを知り、毎日自分自身の過ちを改めるようにするのである。もし、一日でも自分の至らないところに気がつかなければ、それは一日自ら正しいと思って安易にすごすことになり、一日でも己の過ちを改めることがなければ、その一日は進歩もなく無駄にすごしたことになる。世の中には聡明にしてすぐれた人物が沢山いるが、そのものたちが徳を修めることもなく、功業（外に向って善根功徳を積む業）も広まらないわけは、ただ「因循」という二字のために安逸を貪って一生をだいなしにしてしまうからである。雲谷禅師より授けられた「立命の説」というのは、きわめて精しく、きわめて奥深く、極めて真実にして、極めて正しい道理である。よってお前はこのことについてよく熟慮玩味して、一所懸命行ない、時を空しく過してはいけない。

（三）過失を改める方法

春秋時代の大夫たちが、人の言動を観察し、予測してその禍や福を説明するのに、一つとしてあたらないものはなかった。それは左氏伝や国語に書かれているものを観るとよくわかるのである。およそ吉凶の兆は、始め心の中に萌してそれが動作として身体に現れてくるものである。その手厚い方にゆき過ぎるものは常に福を得られ、手薄くて薄情の方に流れるものは、常に災禍に近づくことになる。凡俗の眼は人欲によって厚くおおわれているので真実のものが見えにくく、心も定まらないから、予測することはできないものがあるといえる。ところが至誠は天に合するものである。それ故、福が訪れようとするときは、その善の兆しを見て、それをあらかじめ知ることが出来るので、実行するのである。禍いの来ようとするときも、その不善の兆しを観て、前もってこれを知ることができるので、これを取り除くのである。春秋の時代は古の聖人を去ること、それほど遠くない時代であるから、その大夫たちの徳も高く、そのいったことが多くあたるのはもっともなことである。

イ、恥心を発すべし（恥を知るべきである）

いま、禍より遠ざかって福を得ようとするならば、善を行なう以前に、まず過ちを改めるべきである。その過ちを改めるには、まず第一に恥を知る心を起すべきである。思うに、昔の聖人賢者は、我々と同じように一人の人間にすぎなかった。それなのに聖賢はどうして万世の師表と仰がれるようになったのであろうか。それに反して我々はどうして一身が瓦礫のように取るに足りないようなつまらない人間になるのであろうか。それは世俗の欲望にとらわれ、影で悪事をはたらきしかもそれを人は知るまいと思って、傲然といばりちらして恥ずるところがない、これではまさに日に日に鳥や獣のようになり、堕落して、しかも自分では気がつかないので、世の中ではこれ以上恥ずべき行ないはないのである。孟子は、「恥というものが人の心に与える影響は非常に大きい」と言っているが、それはこの「恥を知る心」を体得すれば聖人・賢者となり、「恥を知る心」を失えば、禽獣のようになるからである。この「恥を知る」という心を起すことが過ちを改める重要なポイントである。

ロ、畏心を発すべし

過ちを改めるところの第二の方法は畏れつつしむ心を起すべきである。何を畏れるべきかといえば、天地の神すなわち上天は我々の行動を常にごらんになっており、神仏を欺くことはで

きない。わが過ちがどのように微かであっても、天地神仏はちゃんとご覧になっておられる。そして過ちの大きいものにはいろいろの災難を降し、軽い場合には現在の自分の福を傷なうことになる。してみれば我々は目に見えない天地や神仏をどうして畏れないでいられようか。

そればかりではなくふだん暇で何もしない時でも、神明がご照覧になっている状態はあたかも十目（多くの人の目）が視ており、十手（多くの人の手）が指摘しているように、心の奥底まで明白に見すかされている。それ故自分では手抜かりなく完全に覆い隠していると思っていたり、またうわべだけをかざってうまくやったと思っていても、神明は心の底まですべてお見通しであるので、みな暴露してしまい、結局自分で自分を欺きとおすことはできないし、たちどころに人に見破られてしまい、何の役にもたたないのである。そこで日常においてどうしてつねに畏れつつしむ心を持たないでいられようか。

ただそればかりではない。生きている限りは天を掩う程の悪であっても、これを悔い改めて新しく生れかわることができる。昔の人の中に一生の間悪事ばかりしていたが、死ぬときになってすっかり悔い改め、一大善念を起こして、ついに大往生をとげた者がいる。このことは、「勇猛果敢なる一念があれば百年にわたり積もった悪事も綺麗さっぱりと洗い流すことができる」ということをいっており、これを譬えてみれば、千年の間も日が照らない暗黒の谷間も一

点のわずかな燈火に照らされれば、千年来のくらやみも一挙に明るくなるようなものである。それ故に、過ちには旧いとか新しいとかは関係なくただ改めることが大切なのである。しかし、この俗世間は無情であり、この肉体は、はかないものである。一たび呼吸が絶えたならばもはや悔い改めようとしてもどうしようもないのである。もし、悔い改めることを知らなければ、この世においては百年も千年もこの悪名を残し、たとえ孝行なる子女や慈悲深い孫がいたとしても、この悪名を洗い流すことはできない。また死んでしまえば千年万年にわたって地獄の苦しみに堕ち、その責め苦にたえられず、たとえ聖賢、仏、菩薩といえどもこれを救うことはできないのである。どうしてこれを畏れないでいられようか。

ハ、勇心を発すべし

第三には勇猛心を奮い起こすことが必要である。一体人が過ちを改めることができない原因は多くのものが眼の前の一時の安楽のみを貪り、因循姑息な態度をとって常に現状に甘んじて、何をするにも消極的でしりごみばかりしていて向上心に欠けているからである。故にわれわれは過ちを改めるには奮然として大勇猛心を振い起こさなければならない。そして改めることは即刻これを改めるべきで、それを後日に引き延ばしたり決断力に欠けるようなことがあっては

ならない。愚図愚図して疑惑を持ったりしていてはならないのである。小さな過失は、あたかもトゲが体に刺さったように即刻速やかにこれを抜きとらなければならないし、大きな過失は、あたかも毒蛇に指をかまれたように即刻速やかにその指を切断して毒が全身にまわらないようにしなければならない。それを少しでも躊躇(ちゅうちょ)して猶予(ゆうよ)を与えてはならないのである。これは『易経』の中の風雷益の卦にある教えのように風が吹き雷が動いて万物を成長させ益をなすゆえんである。君子はこの象を見て「善を見れば則ち遷(うつ)り、過有れば則ち改む」（人の善いところを見るときは速やかにそれを学び、自分の過失を見るときは直ちにこれを改めるのである）と。

この「恥心・畏心・勇猛心」の三つの心を具(そな)えていれば、過失のあったときはすぐに改めることができ、それはあたかも春先の氷が太陽に照らされればすぐにとけて消えてしまうように過失はなくなるのである。

（四）過失を改める工夫

イ、事上よりの工夫

人の過ちにはそれを改める場合に、具体的なことに直面して改めるものがあり、道理の上から改めるものがあり、心の上から改めるものがあり、その工夫はいろいろやり方があって同じでなくその効果もまた異なるのである。これらについて話せば、前日まで殺生(せっしょう)していて今日はすっかり改めて殺生をやめ、前日までどなりちらしていても、今日は戒めて怒らぬようにするのは、これはその具体的な事柄について改める場合である。このように過失を犯してから、この次から犯さないように、無理して外部からおさえつけることは非常に難しいことで、自然に改めるのに較(くら)べて百倍も困難である。しかもそれでは過失を犯すところの病根がいぜん残っていて、ついにはなくならない。一時的に無理におさえつけたものはその反動がやがて現われてくるときがある。それはあたかも東の方で消滅しても西の方であらわれてくるように、結局根本的にきれいさっぱりとその病根を取り除く方法ではないのである。

ロ、理上よりの工夫

外部よりおさえつけて改めるよりも、さらに善く過ちを改める方法は、その事柄をしてはいけないと禁止する前に、まずその道理を明らかにすることである。たとえばわが過ちが好んで殺生することにある場合は、つぎのように考えて自分に言い聞かせるとよい。「上帝（天にい

る神）とは殺生を好まず、生を好むものであり、万物もみなわが生命を惜しみ愛するものである。それなのにそれを殺して己自身を養っていくというやり方は、どうして自ら心穏やかでいられるであろうか。その上それが殺される場合はすでに刀で割かれ、また煮たった釜の中に入れられ、その苦痛たるや骨身に徹する程むごいものである。そこで己自身を養うということを考えてみると、どのように豪華な山海の珍味を並べてみても、食べてしまえばそれだけのもので舌先三寸の楽しみにすぎなく空しいものである。その反対に疏食のような粗末な食物でもみな腹をみたすことができるのに、どうして美食を好んで己の福徳を失う必要があろうか。

またつぎのように考えてみるとよい。「生きものとして血の気があり、生命のあるものは、みな霊性知覚をそなえている。霊性知覚をそなえていればみな我が人間と一体であるといえる。たとえその躬が多くの徳をそなえた聖人のような人でなくとも、その名声が天下に鳴り響いていなくても、また万人から尊敬されるようなことがないとしても、またどうして毎日、生き物の生命を奪い、それらの生き物に恨まれるようなことがあってよいであろうか。そのようなことはできない」と。このように考えてみると、生き物を害してそれを食べるとき、その食物に対して心が痛み、咽を通らないように感じられるのである。

これまで怒り易い癖のあったものは、必ずよく考えて次のように言うべきである。「各人にはそれぞれ長所あり、短所がある。そこで、短所があったり、行き届かないところがあるのは、情として気の毒に思うべきであってその点を許してやるのである。もし相手が道理にそむいて犯すことがあっても、その過失は完全に相手側にあって自分には何の関係もないことである。それ故もともと怒るべきことは何もないのである。またこのように考えるとよい。「天下の中に自分で自分のことを過ちのない完全な人間であると是認している人間はいないのである。また学問をすれば自分の欠点がわかるので、益々謙虚となり自分を反省するので、人を怨んだりとがめたりするようなことがなくなるので、この世に人をとがめだてするような学問は存在しないのである。また自分の行いに至らないところがあるのは、みな自分の徳が足りないために人を十分に感化させる迄に至っていないからである。それ故、事がうまくゆかないのはみな自分が至らないからである」と反省したならば、たとえ他人からいくら悪口を言われても、それはみな自分の精神を修養鍛練して人格を完成させてくれるものであるから、自分はよろこんでその悪口を甘んじて受けるべきであって、どうして怒る必要があろうか。

また他人が自分を誹謗(ひぼう)するのを聞いて怒らなかったならば、たとえその誹謗の焔が天をこがすようにひどくても、その火はただ天に向って焼きこがすだけであって、焼きつくすものがな

いのでその火が自然とおさまってしまうように、他人の自分に対する誹謗の火も自然に消えてしまうのである。

その反対に誹謗を聞いて、もし怒ったならば、たとえいかに巧妙に弁解したとしても、それはあたかも蚕が繭を作るように自分で自分を縛って身動きができなくなってしまうのである。故に怒りはただ益がないばかりではなくその上害となるものである。その外のいろいろの過失も、みな道理によって考えてみるがよい。この道理が明らかになったならば、過ちが自然になくなるであろう。

八、心上よりの工夫

心の上から改めるということは、一体どのようなことをいうかといえば、過失の数はいろいろとあり千差万別限りないものであるが、しかし、これらはすべて心から作り出されているので、心以外の何物でもない。わが心が動かなかったならば、一体過失はどこから生ずるであろうか。それ故、学問修業をする者は、あるいは女色を好み、名誉を好み、財貨を好み、怒り易いなど、さまざまの過失において、必ずしも一つ一つの過失についてこれを改めようとするのではなく、ただ一心の上においてこれをあらため、善心（道心）を起し、善を為せばよいので

ある。このようにして正念が時々刻々いつでも現われるようになれば、邪魔な考えは自然と心を汚すことなく消えてしまう。それはあたかも太陽が空に昇り輝けば、ちみもうりょうが跡形もなく消えてしまうようなものである。これこそ聖人が「惟れ精、惟れ一」（註1）と教えた真伝でもある。過失というものは心によって起こりもし、また心によって改めることもできる。それは毒のある木を伐るには、ただちにその根元から断ち切ってしまうようなもので、そうすれば再び生えてくる心配はないのである。それなのにどうして一々枝を切ったり、葉を摘んだり、枝葉末節のことに心を労する必要があろうか。

過ちを改めるには、以上述べたように具体的な事実に直面して改めるのと理の上から改めるのと、心の上から改めるのと三つの方法があるが、しかし、最高の者は心から改めてこれを修めるのである。この心を修めることができれば、心中はつねに清浄を保つことができ、邪念が一寸でも動けばただちに自覚してこれを取り除くことができる。これを自覚すれば邪念は自からなくなるのである。邪念が起きなくなれば、どうして過失を犯すようなことがあろうか。これが過ちを改めるところの最高の方法である。もしこの方法ができない場合には、その過失を犯してはならないところの道理を明らかにして、その過失の源となる邪念を取り除くべきである。またそのようにもできなかったならば、具体的な一つ一つの事柄について、これを禁止し

てゆくべきである。心を修めている最高の者が第二、第三の工夫方法（事の上や理の上から改めるる方法）を兼ねて行うのは、まだ間違ってはいないが、しかし、第二、第三の工夫のみにとらわれて、最高の心を修める工夫をおろそかにするのは愚かなことで、まずい方策といわなければならない。

そこで過失を改めようと決意したならば、表面上に現われた現象としては、良い友人があらわれて君が迷っている時には、つねにその迷いを醒ましてくれ、また表面にあらわれない隠れた現象としては鬼神（神仏）が証明してくれ、自分が従来犯してきた過失を天地神明に報告し、一心になって懺悔して心をあらため、それを昼も夜も怠ることがなかったならば、或いは七日或いは、一ヶ月、二ヶ月、三ヶ月とたつうちに必ずその効果があらわれてくるのである。その効果とは非常に多種多様にわたっている。それは或いは自分自身が精神的に解放されて快適で安らかとなり、或いは従来非常に愚かであったものが忽然として智慧が開けてきたようになり、或いはわずらわしい世事の雑務を処理するにも、よい考えが浮んできて、みな自然に通じて解決されたり、或いは怨恨のあるものに出逢っても、忽然としてその怒りを転じて喜びとしてしまい、或いは黒い物（いろいろの邪の念や汚れた心の積みかさねによって蓄えられた腹中の悪気）を吐き出したり夢を見たり、或いは昔の聖賢が自分を指導し抜擢してくれたことを夢見た

り、或いは空中を飛び歩く夢を見たり、或いは仏や菩薩が出現する時に用いる各種各様の旗や天蓋を夢見たり、いろいろ殊勝な珍らしい事があるが、これらはみな過失がなくなり、罪業が少なくなったしるしである。しかし、このようなしるしがあるからといって高慢になり、向上の道を自ら断ってしまってはならない。道理というものには窮まり尽きることがない。それと同様に過ちを改めるのにどうしてこれでよいということがあろうか。　むかし教伯玉という賢人がいたが、この人は二十歳のときに、すでに自分の過失を覚って、毎日自己を反省点検して、これを改めるようにした。したがって彼の過失はすべてことごとく改めることができた。しかし、二十一歳になると以前に改めた過失はまだ十分でないことを覚った。二十二歳になってまた二十一歳の時のことを回顧すると、夢の中にあったようにあいまいのうちに過ぎ去って十分でないことを覚った。このように一年一年と自分を点検して、だんだんと過失を改めてゆき、五十歳になったとき、やはり四十九年の非（過失）を知ったということである。古人が過ちを改めるために一所懸命反省することはこのように熱心であったのである。

わが身は平凡な凡人であるから、過失や罪悪もはりねずみのように全身にはりめぐらされている。しかも過去を思いかえすと、いつでも過ちがなかったように思われるのは、決して過ちがなかったのではなくて、実に心が人心の欲望におおわれていて綿密詳細に自己を点検するこ

とを知らず、心眼がくもっていて自分の過失に気が付かなかっただけである。しかし、過失や罪悪の重大なものにもやはりその効果はあるものである。心がくらく塞がっていて何事でもただちに忘れてしまったり、或いは何事もないのにいつでも独りで心を悩まし苦しめており、或いは徳のある君子に会えば恥いって小さくなったり、或いは正しい議論を聞いても楽しく感じない。或いは恩恵を人に施してもかえって怨まれたり、或いは悪夢におそわれて心を取り乱し、甚だしきに至っては妄らなことを口にして常軌を逸してしまう。これらのさまざまなことはみな悪業のせいである。それ故、かりに少しでもこのようなことがあったならば、ただちにその悪業から逃れるために奮発して旧い悪を捨て去り生れかわって新しい道を歩むようにするのである。そうして再び過ちを犯すことのないようにするべきである。　『易経』に「積善の家には、必ず余慶あり」（善根功徳を積みかさねた家には、必ず子々孫々までその恩沢がゆきわたる）といっているが、昔、顔氏がその娘を叔梁こつに（孔子の父親）にめあわせようとして孔家の先祖が徳を積むことが非常に厚く、しかもそれが長期にわたっていたことを逐一説明し、このような家にはその子孫に必ず立派な人物が出て家を興すものがあることを前以て知ったということであるが、はたして孔子のような大聖人が出てきたのである。孔子は舜が大孝であったことをほめたたえて、「舜の祖先の神霊はその祭を饗け、また舜の子孫を長くその福を保った」

（註2）といっているが、まことに正論である。試みに次にこれまで見聞したところを以て、これを証明してみよう。

楊少栄（帝王の学問の上での師匠）は福建省の建寧府の人で、代々渡し守り（船頭）をして生計を立てていた。あるとき長雨が降り続いたため、谷川の水が氾濫し、その激流は民家を押し流し、多くの溺死者が流されていくという有様であった。このとき川に出ていた他の舟ではみな流れてくる家財道具や金目の物を船に引き上げたが、ただ楊少師の曾祖父と祖父は専ら人を救うことのみに専念して、金目の物には一切目をくれなかった。このことを村人たちは馬鹿者だとあざ笑った。ところが後に楊少師の父が生れたころになると、家運も興り段々と裕かな暮らしむきになってきた。そのころ神様が道士の姿になって、少師の父に告げていうには、「お前の祖父には陰徳があったから、子孫は必ず高貴となり、世に現れるであろう。それ故、墓をこの土地に作って葬るがよい」と。そこでそのお告げにしたがって墓を定めた。それが、すなわちいまの白兎墳である。後になって、楊少師が生まれた。二十歳のときには進士の試験に及第し、位は三公にまでのぼり、曾祖父や祖父にも父と同様の官を贈り、子孫も高貴に栄え、今日なお賢者が多く輩出したのは陰徳のたまものによるものである。

曦県人の楊自懲は、初め県庁の役人となったとき、その地位は低かったが、その心はつねに

慈悲深く、道義心に厚く、法律を守り公平無私であった。その当時の県の長官であった人が、たまたま、一人の罪人を、怒り狂って鞭打ち、血が流れて悲惨であった。楊自懲はこれを見るに忍びず、長官の前に跪づいて怒りを和らげるように頼んだ。長官がいうには、「このものには禁則を犯し道理にはずれたことをしたのに、どうして怒らないでいられようか」と。自懲はこれに対し、さらに頭を地にすりつけて、『長い間、上に立つものが道をふみはずしているので、下の人民たちの心は道から離れてしまっているのである。もしその罪を犯した実情を知るならば、民の罪を犯したことを憐れみ悲しんで、それを自分の手柄と思って喜ぶようなことがあってはならない』ということを聞いています。してみると、喜ぶことでさえもいけないのに、まして怒ることにおいては、なおさらなすべきではないでしょうか』というと、長官はこれを聞いて、怒りもおさまり顔色もやわらいだのである。

楊自懲の家は非常に貧しかったが、人からの贈り物は少しも受け取らなかった。獄にいる囚人のうちで食物の乏しいものに出逢えば、いろいろと手をつくして救ってやった。ある日、新参の囚人数人が獄に来たが来る途中何も食べなかったので飢餓のために苦しんでいた。楊自懲は家でもあいにく米が乏しく、囚人に与えれば家のものは食べられないし、といって自分の家庭と比べてみれば囚人の方がさらに気の毒でたまらないという状態だったので、妻に相談する

と、妻は、「囚人はどこから来たのですか」と尋ねた。楊自懲は答えて「遠方の杭州から来たもので、途中何も食べずに飢餓を我慢して来たので顔面蒼白にして血の気がなく誠に気の毒である」と。そこで自分等の米を残らずもち出して粥を煮て囚人に食べさせた。後になって、楊自懲には二人の子供ができた。長男を守陳と名づけ、次男を守阯と名づけた。おのおの南北の吏部侍郎（人事行政を掌る官庁の次官）となった。長男の孫は刑部侍郎（刑罰を掌る官の次官）となり、次男の孫は四川の監察官となった。いずれもともに優れた高級官僚となった。いまの楚亭と徳政というのもまたその子孫である。

以前、明朝の正統皇帝のときに、徳茂七というものが福建で乱を起した。現地では士民で賊に従うものが甚だ多いという有様であった。そこで朝廷では曦県の張都憲楷を起用して南に向って討伐させ、張楷は計略をもって賊の曦茂七を擒にした。後に福建省東部の方にまだ賊の残党が多くはびこっていたので、張楷は又布政司（各省の行政事務を管理する長官）の謝部事に命じて討伐させた。謝部事はみだりに人を殺傷することのないように、いたるところで賊軍の名簿をさがしだし、その名簿に名前がなく、賊に付いていないものには、ひそかに白布の小旗を与え、討伐軍が到着した日には、その旗を門前にさしはさんでおくように命じ、一方味方の軍隊に対しては白旗を立てている家には妄りに入らないように厳しく戒めた。そこでこの小旗

のおかげで殺傷を免れて、命を助かったものが一万人もあった。後に謝都事の子の遷は状元に及第し宰相（総理大臣）となった。孫の不もまた探花（殿試に三位で及第すること）に及第した。これらはみな謝都事の陰徳のたまものである。

福建省の甫田県に林という家があった。その先祖に善事を好む老母があった。この老母は日ごろ米の粉で団子を作って貧しい人たちに施し、もらいに来るものには、ただちにこれを与えその施しに勤め励むことを楽しみとしていた。このことを知った一人の仙人が老母の行ないがその誠心から出たものかどうかをためそうとして、一人の道士に姿を変えて、毎朝来て六つも七つも団子を要求して食べた。老母は日々団子を与え三年たってもなお一日のごとく飽きることなく施しを与えた。そこでその仙人は老母がほんとに誠心から施していることを知った。よって仙人は老母に告げて、「わしはお前さんの施してくれた団子を三年間も食べたが、お前さんの好意に何を以て報いたならよいであろうか。役所の裏にある土地があるが、お前さんが死んだなら、そこに葬ってもらいなさい。そうしたならお前さんの子孫で高級な官位や爵位を得るものはまさに数えきれないほど出てくるであろう」と。そこで老母の死後、子は教えられたところに老母を葬ったところが、道士が言ったように一代に九人も進士の試験に及第した者があった。その後もその一族から代々高位高官に登るものが非常に多く、福建の民謡にも、「林

氏の家で官吏登庸試験に合格しないものはない」とうたわれるようになった。

馮琢庵太史の父は秀才の試験に合格して県の学校に通っていた。ある年の冬、厳寒の朝、早く起きて学校に行った。途中で一人の雪倒れに出遭ったので手をさしのべて、さわってみると、凍ごえて半ば死にかかっていた。そこで自分の着ていた綿入れの服を脱いで着せてやり、かつ扶けてさらにかかえるようにして家につれ帰り一命を救ってやった。それからある日一つの夢を見た。その夢の中に神人が現れて告げていうには、「お前は人の一命を救ってやり、そのことはお前の誠心から出たものである。したがってわしは韓◇を遣わしてお前の子どもとしてやろう」ということであったので、琢庵を生んだとき、それによって◇と名づけた。（韓愈は後に宋の王朝で文武兼備の名将軍となり、英宗神宗皇帝の時に十年にわたって宰相をつとめた。後世の人は韓忠献公と呼んでいる）。

台州の応尚書は壮年のころ、山の中で勉強していた。夜になると鬼どもが多く集まってきてわめきあって、つねに人を驚かしていたが、公は少しも懼れなかった。ある夜、鬼が「某家の嫁は、夫が長い間他国へ行って帰って来ないので、その夫の父母は死んだものと思いこみ、他家へ嫁入りするようにせまった。それを苦にして嫁は明晩このところで縊死する（首をつって死ぬ）であろう。そこで自分は身代りとなって首を吊ろうと言った」（それは、首吊りをして死

んだ霊は新しい首吊りがあるときに其の人の霊に代ってやってこそ人間に再び生れかわることができるという言いつたえがあると聞いた）公はこれをみて気の毒に思い、密かに自分の田畑を売って、銀四両を得て、ただちにその夫の手紙を偽作して、銀を添えてその家に送りとどけた。その父母たちは手紙を見て、どうも筆跡が夫のと似ていないので不思議に思ったが、しばらくして「手紙はいつわりを書くこともできるが、銀は本物で間違いない。してみると多分せがれは無事であるのだろう」ということで、嫁はそのまま他家に嫁ぐことをせずにすんだ。後になって、その夫は家に帰って来て、もとのように夫婦仲よく暮らすことができた。

ある夜、公はまた鬼の語るのを聞いた。「自分は折角代ってやろうとしたのに、この秀才がわが事をぶちこわしてしまった。困ったことだ」と。すると傍にいた別の鬼が言うには、「お前はなぜそのようなことをされたのに、報復しないのか」と。前の鬼がそれに答えて、「それは天帝が、この人が善い心を持っているので陰徳尚書と命名してあるほどであるから、どうしてこの人に禍を下すことができようか」というのを聞いて応公はますますみずから努力大奮起して、日々善事を行ない、日々に徳行を積んでいった。たとえば凶年にあえば、すぐに穀物を民に施してこれを潤してやり、また親戚に困ったことでも起きれば、あらゆる方法を講じて救ってやり、非道なことを言ったり、行なったりするものがあれば、自分の身を反省して責め、

平静になってこれを素直に受け入れた。このようなわけであるから、公の子孫で進士の試験に及第するものはいまに至るまで非常に多く出しているのである。

常熟の徐鳳竹の、父はもとから裕福な人だった。ある年、たまたま凶年にでくわしたが、その父はまっさきに、小作人に対し徴収すべき年貢米を免除してやり、全県下で田地を所有している地主たちのさきがけとして、手本として他の者もこれを見習うようになった。またそれだけではなく自分の穀物を分け与えて貧乏人を救済した。このようなことをした或る夜、鬼どもが門前に来て叫んでいるのを聞いた。その言葉は、「千に一つも人を欺くような言葉はなく、万に一つも人を欺くような言葉はない。徐家の秀才の子はまもなく挙人（郷試に合格した者）となるであろう」と、毎晩繰り返し叫んで絶えることがなかった。この年はたして鳳竹は郷試に合格して挙人となった。このことによって、鳳竹の父はますます徳を積むことを努めて怠ることがなかった。例えば橋の修築をし、道路を改修し、僧に施し、苦しんでいる人を助け、およそ人々にとって利益になることには積極的に努力をした。すると後になって又鬼が門のところで叫んでいるのを聞いた。「千に一つも人を欺くような言葉はなく、万に一つも人を欺くような言葉はない。徐家の挙人はやがて出世して都堂（官吏の非行の弾劾と各省の監察をつかさ

どる官職）になるであろう」と。はたして都堂だけでなく、両浙の巡撫使（総督の次の役職）にまで出世したのである。

嘉興の屠康僖公は、初め刑部の主事であった時に、監獄の中に宿直して事細かに囚人たちの実情をしらべたずね、無実の罪で囚えられているもの幾人かを見出だした。本来ならば無実の囚人を見つけ出すということは非常に功労があるが、そのことを公は自分の功績としないで、そっと箇条書きにして長官に差出した。後になって官の審議があったとき、長官は公の上申した公文書の内容について、多くの囚人たちに問い正したところ、その内容の真実に服従しないものはなかった。このようにして無実の罪を免れたものが十余人もあったのである。それ故、一時は都に住んでいた人がこぞって刑部尚書の明智をほめたたえた。これも実は公のかげの功労によるものである。さてまた、公は上申していうには、「天子のお膝もとでさえ、なお無実の罪に陥っているものがこのように多い、まして広大なる全国において、多くの人民の中に、どうして無実の罪に泣いている者がいないといえようか。そこで五年ごとに一人の減刑官を各省に派遣して、その罪の実情を明確にしらべて、罪の軽重によって、公平なる判決が行われているか、また冤罪をこうむっている者は、これを無実にしてやるべきである」と。尚書はこれを聞いてさらに朝廷に奏上したところが、朝廷は早速採り上げてその議を許可した。そのとき

公もまた減刑官の一人に選ばれた。ある夜の夢に一神人が現れて、「お前の運命は本来子供がいないことになっているが、いま減刑官を置くべき議案は、深く上帝の民を慈しむ御心にかなっている。そこで上帝はお前に三人の子供を授けたまうことになり、しかも、それが将来みな紫衣を着、金印を佩びる高官となるであろう」と告げた。このお告げのあった晩に公の夫人は妊娠した。その後、はたして応維・応坤・応食を生み、みな高官に登った。

嘉興の包憑は字を信之という。その父は池陽群の太守（郡の長官）で、七人の子があった。そして憑は一番すえの子であった。平湖県の袁氏の婿となり、私（了凡）の父とは非常に親しく交際していた。包憑は博学で才能の優れた人物であったが、運悪く幾度も進士の試験を受けたが及第しなかった。彼は道教と仏教の2種の学問に心をよせて学んでいた。ある日、東の方にある卯湖に遊んで、たまたま一農村のある寺を尋ねたところが、その寺院の家屋は朽ち果て、観世音菩薩の像が雨ざらしにされて立っているのを見た。そこで早速財布のひもを解いて金十両を取り出し、寺の住職を呼んで金を渡し、お堂の屋根を修繕させるようにした。ところが僧がいうには、「修繕することは大仕事であるが、惜しむらくは金が少なく、足りませんので、これでは仕事を完成させることはできません」ということであったので、さらにまた松布四匹を取り出し、箱のなかの衣類を七点選び出して与えた。その中に麻で作った袷は新品であった

ので、彼の下僕がそれだけはとっておくように願ったが、しかし、包憑は聞かずに、「ただ観世音菩薩の聖像さえ、はだかで雨ざらしにされることなく無事に安置することができたならば、たとえ自分ははだかになっても少しもかまわぬ」と答えた。このことを聞いた僧は、涙を流して感激し、「金や衣類を喜捨（寄付）することは、それ程難しいことではないが、ただこの一点の誠心を得ることだけは容易なことではない。他人にはとてもでき難いことである」といった。その後、このお堂修繕の工事が完成したので、憑は老父を伴って、ともにこの寺に詣り、一泊した。するとその晩、公の夢に伽藍の護法師が現われて感謝していうには、「お前がこれらの功徳を積んだので、お前の子孫はまさに代々官職について俸禄を受けるであろう」と。そののち、はたしてお告げの通りに、子の返、孫の聖芳など、みな高位高官となった。

（註1）「惟れ精、惟れ一」……舜帝が禹に位を譲るときの真伝に、「人心惟れ危うく、道心惟れ微かなり。惟れ精、惟れ一、允にその中を執れ」とある。

『伝習録』に、ある時弟子が「書経の惟れ精、惟れ一の修行は、どんな方法を用いたらよいでしょうか」と尋ねると、王陽明先生答えて曰く、「惟れ一、即ち天理と一体になるのは、惟れ性即ち天理・人欲の区分を明らかにすることの目的であり、惟れ精は惟れ一に至るまでの修

行過程であって、それは結局同じものであり、惟れ精の外に、惟れ一があるわけではない。精の字は米偏の字だから、試みに米を譬えにして見よう。米が純白になるようにしようとするのは、惟れ一の修行に当たる。それをするには、臼で搗き、箕であおり、ふいごにかけて屑を除きえらぶなどの、精米の労を加えなければ、できないことである。このうすづき、あおり、ふるい、えらぶ仕事が、惟れ精の修行に当る。それはただこの米が純白になるのを求めることに外ならない。だから強いて分けて見れば二つのことであるが、事実は同じことなのである」と。

また「人の心は一つあるだけで道心・人心と分けられるものではない。いわば人心の正しい状態が道心であって、道心の正しさを失った状態が人心なのである。人間に初めから二つの心があるわけではない。程子は、『人心は人欲のことで、道心は天理だ』と言った。この語は一見心を二つに分けているようでいて、主旨においては実は間違っていない」とある。

（註2）「舜の祖先の神霊はその祭を饗け、また舜の子孫は長くその福を保った」……『中庸』に「子いわく、舜はそれ大孝なるか。徳は聖人となり尊きは天子となり、富は四海の内を有す。宗廟これを饗け、子孫これを保つ」とある。

嘉善の支立の父は監獄の役人であった。その父が、或る囚人で無実の罪によって死刑になりそうなのを見て、心中深くこれを哀れみ、何とかして命を救ってやりたいといろいろ手をつくしていた。その厚意に感じた囚人が、監獄に会いに来た妻に対していうには、「支公（支立の父・監獄の役人）がいろいろと私に尽くしてくれた厚志は、まことにありがたく、しかも何の報いもできないのは、本当に残念に思っている。そのようなわけであるから、明日、支公をわが家に招待しよう。そこでお前は身をささげてつかえてくれよ。もし彼がそれを承知してくれたならわが一命は助かるであろう」と。妻は泣く泣くそれを承知した。さて、翌日支公は招待に応じて囚人の家を尋ねると、囚人の妻はみずから出て酒を勧め、歓待してつぶさに夫の意志を告げ、身を提供してつかえたいと申し出たけれども、支公はそのような不義はついに聴き入れなかった。支公は囚人の妻の申し出は断ったけれども、囚人の為に力を尽くしてやり、再審理してその囚人は死刑を免れて無罪となった。そこで監獄を出ることができたので、夫婦そろって支公の家を訪ね平身低頭して礼を述べていうには、「公のこのたびのような手厚い恩徳は末世には滅多に見られないことである。惜しいことに、あなたさまは、いまもって子がおられぬ。自分には小娘がおります。どうぞこれを公の許に遣わして召使として使って下さい。これならばよろしいではありませんか」と。このことを聞いて支公も道理と思い、妻を迎える礼を

以てこれを迎え、やがて子供の立を生んだ。立は二十才で科挙の試験を首位で合格し、海林孔目の高官にいたった。この立には高という子供ができ、高には禄という子供ができた。ともに薦挙せられて学博となった。禄には大綸という子供ができた。この綸もまた試験に及第した。

以上およそ十人の例を述べたが、その行なうところは各人それぞれ異なってはいるが、帰するところは同じく善である。もしさらに詳細にわたってこれを言えば、善にも真（本物）あり、仮あり、直あり、曲あり、陰あり、陽あり、是あり、非あり、偏あり、正あり、半分のものあり、満ち足りているものあり、大なるものあり、小なるものあり、困難なものあり、容易なものあり、これらはすべてがそれぞれの道理があるので、これらを詳細に識別すべきである。もしせっかく善事を為しても、その善事を為すところの道理を知らず、ただ自分が善事を為したことを誇っていれば、かえって逆に罪を造り、多くの苦心がみな水の泡となり、少しもプラスにならないということをどうして知らないのであろうか。

いま、以上述べた各種の善事について一つ一つ分けて明白に説いてみよう。まず何を真仮（本ものと偽もの）というか、君達に話してみよう。以前、儒教を学んでいた儒生（学生）たちが中峯和尚に面会して質問した。「仏教では善悪の報いは影の形にそうように離れることはないと言っている。これは善事を為せば必ずよい報いがあり、悪事を為せば必ず悪い報いがあると

言うことである。それなのに何故現実には、ある人は善を為したのにその子孫は繁栄せず衰退し、ある人は悪を為したのにその家は逆に非常に繁栄しているのでしょうか。このように見てくると仏教でいうところの因果応報とは信用できないのではないでしょうか」中峯和尚が答えて言うには、「善悪の真偽を見分けるには、普通の人が持っている世俗の見解を捨ててしまわなければ、正しい心眼を開くことができず、判断を誤ってしまう。そこで善を悪と見なし、悪を善と見なすので、これは常に犯しやすい弊害であり、かつその上で真善が偽善であることを見損なっていることを棚に挙げて、かえって天の報いが間違っていると怨んでいるのである」と。そこでみなが反発して言うには、「一般の人はみな善を善と見なし、悪は悪と認めているのに、どうして善を悪と見なし、悪を善と見なす相反する見方をするのでしょうか」と。そこで中峯和尚は彼等に一体、彼らが善と認め悪と認めるものがどのようなものであるか、実際のありさまをみなにいわせた。一人が言うには、「人を罵しったり人を殴打（なぐること）することは悪であり、人を敬ったり礼儀を以て人を応対するのは善である」と。中峯和尚が言うには、「必ずしもそうとはかぎらぬ」と。又ある一人が言うには、「財を貪り妄りに金を欲しがるのは悪であり、清廉潔白にして正道を守っているのは善である」と。中峯和尚が言うには、「又必ずしもそうとはかぎらぬ」と。そこでみんなは平常見聞きするところの種々の善悪に関

する具体的な事柄を挙げたが、しかし、中峯和尚はみな「そうではない」と否定した。

これら儒生たちの説がすべて否定されたので、一体何が真の善であり、悪であるのかを中峯和尚に質問した。これに対し和尚が言うには、「他人の為にプラスになることはすべてこれ善であり、自分の為にプラスになることはすべてこれ悪である。そこで、もしその人の為にプラスになることであれば、たとえそれが、罵しったり殴ったりしたとしても、それらはすべて善となる。それが自分の為になることであれば、たとえそれが人を敬ったり、礼を以て厚く遇したとしても、それらはすべて悪となる。したがって善を為すにしても他人のためにプラスになることであれば、それは公となり、公となれば則ち真である。それが自分のためにプラスになることであれば、それは私となり、私となれば則ち仮である。かつまた良心から発して為す善事は真であり、形式のみを飾って為すことは仮である。又無為にして為す者は真であり、有為にして為す者は仮である。このように種々のことは自分で詳細に考えてみるべきである」と。

何を指して端(端正、直)・曲というかというと、表面的にはいかにも謹しみ深く謹厳実直そうであっても、内心は卑俗であるこのような「郷原の士」は似て非なる者（真に似て真に非ざるもの）であって、世俗からは善人と見なされて尊敬されるが、聖人はこれらの者を排斥して、むしろ狂狷（狂者は狂人と見なされる程積極果敢に善を為す気魄があり、狷者は堅く節操を守

り、断固として不善を為さぬという一徹さがある）、（註1参照）なる者を好むのである。そこで謹しみ深く謹厳に似て非なる者は、一般の世俗ではみな好まれるが、その徳に似て徳にあらず、かえって徳を乱す故に「徳の賊」として聖人は深くこれを悪むのである。このように見てくると世俗の人が言うところの善悪は明かに聖人と相反するので、世俗の人が言うところの善は、聖人から見れば悪であり、世俗の人が言うところの悪は、聖人から見ればかえって善であったりすることがある。これらの事から見ても、世俗の人の好みというのは聖人とは全く相反していることがわかるのである。天地鬼神は善人に対しては必ず福を以て報い、悪人に対しては禍を以て報いるが、それはみな聖人と是非善悪の見方を全く同じくするのであるが、しかし、世俗の人の見方は全くこれと相反する場合があるのである。したがって善行を積むにも、耳目や自分の好みにとらわれて為してはならない。必ず心の根源の一念の萌す隠微なところにおいて、ひそかに自分独りを恐れ謹しみ、つねに悪念や邪念を綺麗に洗い流して清浄心を保持するのである。したがって純粋に世の中の人を救済する心はこれ端（直）であり、もし少しでも世俗に媚びる心があればそれは曲である。純粋に人を愛する心はこれ端（直）であり、もし少しでも世間に対して不平不満の心を持ち憤りをもつようなことがあればそれは曲である。純粋に人を敬うところの心はこれ端（直）であり、もし少しでも人をもてあそぶ心があればそれは曲

である。これらは皆詳細に見分けるべきである。

何を指して陰陽というのであろうか。すべて自分で為したところの善事を他人がみなこれを知ってしまうことを陽善といい、善事を為しても他人がこれを知らないことを陰徳という。陰徳のある人は、他人はこれを知らないが天がこれを知っていて報いてくれるのである。陽善のある人は、みんながそれを知って称賛するので、その人はこの世ですでに人気があり名誉を享受している。この名誉も福ではあるが、しかし、この人気や名誉は天地の忌む所であり、嫌う所である。世間で名声が高く、大変な名誉を享受していながら、実際はその名にそぐわず、それだけ大きな功徳のない人は、多くが思いがけないところの禍にめぐりあうのである。また過失を犯していないにも拘わらず、無実の罪で理由なくして悪名をこうむった人は、その子孫がつねに大いに出世するか、繁栄するのである。このように見てみると、陰徳と陽善のさかいめは非常に微妙であるということがわかるのである。

何を指して是非というのであろうか。以前中国の春秋時代に魯の国で定められた法律に、魯の人民にして、貧しいが為に自分の身を売って他国の金持ちの家の臣妾奴隷となったり、また戦いに敗れて俘虜となり、他国の奴隷の身分にある者を、もしある人が金を出して他国の諸侯

からこれらの人を身請けすれば、この金を出した人は役所から賞金を貰えることになっていた。魯の国は弱小国だったので、常に他国から攻められ、俘虜となって他国の奴隷となる者が多かった。子貢は金持ちだったので、それらの奴隷を身請けして自由にしてやり、しかも魯国の賞金を貰わなかった。それは全く気の毒な人を救う為のもので、役所の賞金など目あてにしているのではなく、全く純粋なる善意から出たものであるが、孔子はこれを聞いて批判して言った。子貢はこの事を間違ったと。およそ聖人の一挙一動はいかなる事であろうとも、それが悪い風俗風習をかえて、世の中を善くするようにし、また一般人民が善行を為すように教え導くことが大切であり、ただ単に自分自身が善行を為して満足さえすれば、それで事足れりとするものではなく、それだけではいけないのである。いま魯の国では富んでいる人は少なく、貧しい人が多いのである。もし賞金を受取ることを以て金を貪って清廉ではないという風潮が生じてくれば、清廉潔白な者や金を多く持っていない人は今後どうして身請けすることができるであろうか。恐らく今後再び外の諸侯に対し身請けする者はいなくなるであろう。

孔子の弟子の子路はある時水中に溺れている人を救ってやった。その人は一頭の牛をお礼に持って来たが、子路はそれを遠慮なく受取った。孔子はそれを知って非常に喜んで言うには、

「今後、魯の国の人は、もし水に溺れている者があれば、これを救おうとする者が必ず多くな

ることであろう」と。このことを世俗の立場から見てみると、子貢が賞金を受け取らなかったことはよいことであり、子路が牛を受取ったことはよくないことである。ところが孔子は、はからずも子路を称賛して、子貢を責めたのである。このように見てくると、「聖人と世俗の人の見解は全く異なっている」ということがわかるのである。そこで個人的に善事を為すにしても、目の前の現在の一時的な精神的な満足を求めることを重視するのではなくて、その為したことが伝わって弊害のもとにならないかどうかを重視する。また一時的に正しいかどうかを重視するのではなくて、永遠に正しいかどうかを重視する。また自分の一身に関することを重視するのではなくて、天下万民に関することを重視するのである。たとえ現在為すところのことが善であっても、それが伝わっていって人を害するようなことになれば、それは善に似て実際は善ではないのである。たとえ現在為すところのことが不善であっても、それが伝わっていって人を救うことができるようになれば、それは不善のようであっても実際は善である。これはただ一つのことに就いて論じただけであって、他にもこれに類することは非常に多いのである。たとえば一時的には義にかなっているようであっても、長期的に見ると義にはずれていたり、表面上は礼にかなっているようであっても、実際は礼にはずれていたり（礼も度が過ぎると媚びへつらいとなり、相手を増上漫にする）、部分的な信のみを重視して全般的な信を顧りみな

かったり、慈愛も度を越すと依頼心や甘えの気持ちが生じ、逆にいろいろと障害が生じてくることになる。このように義に非ざるところの義、礼に非ざるところの礼、信に非ざるところの信、慈に非ざるところの慈、これらはみな似て非なるものであって、一般の人には見分けがつかない。したがってその点をはっきりと認識しなければならないのである。

何を指して偏正というのであろうか。以前、明の時代に呂文懿公が宰相の地位を辞任したばかりの時、自分の故郷に帰って来た。当時、公の名は天下に鳴り響き、みんなこれを仰ぎ見ること高大なる泰山の如く、光り輝く北斗星の如く、非常な人望があった。たまたま郷里の者が酒に酔って呂公を罵倒した。呂公は少しも動ずることなくその下僕にいうには、「この人は酒に酔っているので真にうけて本気にしてはならない」と門を閉じて相手にしなかった。それから約一年たって、その呂公を罵倒した人は死刑に相当する罪を犯して監獄につながれた。呂公はそれを聞いて後悔していうには、もしあの時(酔って自分を罵倒した時)、その事を問題にして本人を役所(司法機関)に送っていれば軽犯罪の程度で処理でき、小さく罰し懲らしめて後に大きな戒めとすることができたのに、その当時はただ寛大なる気持を持って問題にしなかった。それがかえって本人の悪い芽を増長させることになり(宰相を罵倒してもたいしたことはないので、益々大胆になって悪事を積みかさね、遂には死罪を犯す迄に至った)、以て一命を失

う迄に至ったのである。これは善心を存することによって、かえって悪事を助長させたという実例である。

また悪心をもってかえって善事を行うことがある。ある時、大富豪の家で飢饉の年にめぐりあった。貧民たちは白昼堂々と市場で米を奪った。そこでこの大富豪はその強奪した人たちを県の役所に送って告発した。県の役人はこの事件を問題にせず、受理してくれなかった。これら貧民たちは県の役所で問題にしないのを見て益々大胆となり、ほしいままに略奪横行するようになった。そこでこの大富豪は個人的に米を強奪した貧民を捕えて拘束監禁し、辱めた。これより貧民たちはそれを恐れて米を奪うようなことはしなくなった。そこで、治安もおさまってきたのである。さもなければ混乱して収拾がつかなくなったことであろう。したがって善は正であり、悪が偏であるということはみんなが知っている。しかし、善心の好意を持ってかえって悪事を為すことがあり、その心持ちは正しくともその結果は偏となるので、それを「正中の偏」というのである。それとは逆に悪心を持ってかえって善事を為すことがあり、その心持ちは偏していてもその結果は正となるので、それを「偏中の正」というのである（善心を持って善事を為すのは「正中の正」であり、悪心を持って悪事を為すのは「偏中の偏」となる）、これらの道理をみんな知らなければならないのである。

何を半満というか。易経でいうには、善を積み重ねなければ名を成すことはできず、悪を積み重ねなければ身を滅ぼす迄には至らない。書経でいうには、殷の王朝（商）の時代は紂王によって代表されるが、罪悪の限りを尽くしたのである。いわゆる善悪を積みかさねるのは、あたかも品物を倉の中にしまいこむと同様に、毎日勤めてこれを積み重ねていけば、日一日と多くなってやがて満ちて一杯になる。もし怠って積み重ねなければ、満ちて一杯になることはない。これが半善満善の一説である。

昔、某という姓の家に一人の娘がおり、ある時、お寺に行ってお布施を出そうとしたがお金がなく、わずか二文銭しかなかったが、それを全部施した。ところがそのお寺の最高の和尚さんが出てきてみずから仏像の前で回向、供養をしてくれた。後になってこの女は皇帝の宮殿に入るようになり、富貴になった。そこで数千金を持ってお寺に来て布施をした。ところが先の和尚さんは自分の弟子をして回向、供養させた。そこでこの女性は和尚が何故にこのように前には二文銭で丁重に供養してくれ、後には千金を以てしても、弟子に供養させたのかを問うてみた。「私が以前に二文銭しか施さなかった時には、あなたの師匠はみずから私に代って回向、供養してくれたが、現在私は数千金を施したのに師匠は私の為に回向してくれないのは一体どうしたことですか」と一僧がいうには、「以前二文銭を施したとき、施した銭は非常に僅少で

あったが、しかし、その施しの心に非常に真心があった。したがって最高の和尚みずから代って回向、供養して、あなたの真心に報いたのです。今回、金額は非常に多いけれども、その施しの心に以前のように切実な真心がこもっていないので、代りの者をして回向、供養させたのである」と。これが数千金も半（半分）の善であり、二文銭がかえって満（完全・何千倍もの価値がある）の善である。すべてはこの心に真実真心がこもっているか否かによって決定されるのである。

鍾離は錬丹の方法を呂祖（孚聖）に伝えた。それはその丹を鉄の上に点ずれば、たちどころに黄金に変わるというもので、それによって世の中で苦しんでいる人を救済することができると。呂祖が問うた。「その黄金は永遠に鉄に帰ることはないのですか」と。鍾離がいうには、「五百年後には本来の鉄の本質にかえってしまう」と。呂祖がいうには、「五百年後にもとの鉄にかえってしまうのであれば、五百年後の人に迷惑をかけ、それらの人に害を与えることになるので、私はそのようなことはできません」と。鍾離は呂祖の心を試したのであるが、呂祖が眼前の利を貪ることによって後世の人を害なうことがないという心がけ及びその功徳は非常に素晴らしいので、呂祖に向って言った。「仙人となる修行を修めるには三千の功徳を積まなければならないが、君のこの一言は三千の功徳を満たしている（三千の功徳に匹敵している）」

と。これは又半善半満の一説である。

又善事を為しても、それを事故の本分とし当然のこととして、その善を為したことを心に留めたり、鼻にかけたりすることがなければ、いかなる善事といえども、みな随所に成就して円満を得ることができる。それがもし善事を為したとしても、それをいつまでも心に留めていれば、一生涯勤め励んで善事を為したとしても、それは半善にしかすぎない。たとえば財を以て人を救済するにしても、内に布施をするという我自身を見ず、外に布施をする相手を見ず、中間で布施をするその金額を見ない。これを「三輪体空」というのであり、「一心清浄」というのである。このようにいささかの痕跡も残さない布施こそはじめて偉大なる功徳ということができる。それがたとえ僅か一斗ばかりの米であっても、そのような心で布施をすれば無限の福徳を積むことになり、たとえ一文銭の布施であってもそのような心で布施をすれば長年にわたる罪障をも消滅させることができる。もし自分が善を為したことを心に留めていつまでも忘れることがなければ、たとえ何千何万の黄金を布施したとしても、その福は満ち足りることがなく半善である。これも又一説である。

（註1）『論語』に、「子いわく、中行を得てこれに与せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進み

て取り、狷者は為さざる所有るなり」とある。孔子が言うには、「中庸の道を行い得る人物がなかなか得られなければ、わしは必ず狂者か、狷者を得てこれに与しよう。狂者は狂的とも見られる程積極果敢なる気魄があり、狷者は断固として不善と妥協しないという一徹さがあるからである」と。

何を大小というかといえば、以前、衛仲達という者が海林院の役人であった。ある時、地獄の閻魔庁では小鬼を派遣して彼の魂を冥土に引き連れて来た。冥土の役人は、部下の書記に命じて彼がこの世で為した所の善事及び悪事の二冊の帳面を提出させた。この帳面が届けられてくると、何と悪事を記録した帳面がずっと多く庭一杯にひろげられた。それに反し善事を記録した帳面は僅か一巻だけで、それも小さく僅かであった。冥土の役人は又秤を持って来るように命じた。そこで善悪二冊の帳面を秤にかけてはかってみた。ところがどうして庭一杯にくりひろげられた悪事を記録した帳面は軽く、善事を記録した僅かな小さな巻物の方がかえって重いのである。そこで仲達は不思議に思って尋ねてみた。私の年令は未だ四十才に達していないのに、どうしてこのように多くの過失と罪悪があるのでしょうか。冥土の役人がいうには、「それはただお前の一念が不正であればそれが罪悪となり、必ずしも実際に過失を犯す迄待つ必要

はないのである。たとえば女性を見て悪念を起こしただけで、すでに天の定めた法を犯すことになるのである」と。ここで更に、「その小さな巻物の中には何が書いてあるのでしょうか」と。冥土の役人がいうには、「朝廷ではかつて大工事を起し、三山地方の石橋を建造することになった。そこで君は一般人民が労役の為に酷使されて非常に苦しむので、大工事を停止するように奏上した。この巻物は君が朝廷に奏上した意見書である」と。仲達がいうには、「私は奏上しましたが朝廷では結局それを聞き入れてくれず大工事を起しました。それでは結局何の足しにもなりませんでしたが、それでどうしてそんな大きな功徳（悪事を記録した帳面よりも、善事を記録した帳面が重いこと）がありましょうか」と。冥土の役人がいうには、「朝廷ではたとえ君の奏上した意見を聞き入れなくても、しかし、君のこの一念は一般人民の苦しみを少しでも取り除こうとするもので、素晴らしいことである。もし朝廷で君の奏上した意見を受け入れたとすれば、その善の功徳は現在より更にずっと大きかったことであろう」と。したがって善を為そうとする志願が天下国家や一般人民の為になることであれば、その善事はたとえ小さいことであっても、その功徳は非常に大きいのである。それがもしただ自分の一身の為になるというだけで善行を行えば、その善事はたとえ大きくてもその功徳は非常に小さいのである。したがって善の大小はただ公のためか私のためかに在り、それによっても大きく分れてくるの

である。

何を難易というか。以前教養学問のある儒者が言うところの「己に克つ（自己の私心に打ち克ちそれを取り除く）」とは、打ち克つことの難しいところから手をつけて、それを取り除けば、その他のところは自然と容易に取り除くことができるのである。孔子の弟子が、「仁を為すとはどういうことですか」と質問した。孔子が言うには、「先ず困難なところから手を下して功夫しなければならない」と。それはとりもなおさず私心を取り除くことが最も難しいということである。昔、江西の舒翁は学問を講義していた。たまたま貧しい人が役所から金を借りて返済することができず代りに妻を下女として差し出さなければならず、夫婦は離別しなければならなかった。舒翁は見るに見かねて二年来蓄えてきた講義料を全部投げ出して、役所の借金を返済してやり、彼等は夫婦離別から免れることができたのである。又邯鄲県の張翁は貧しい人が妻子を抵当にして金を借り、その金を返済しなければ妻子は生きのびることさえもできないという苦境に立たされた。張翁は見かねて十年蓄えてきた金を全部投げ出してその妻子を救ってやった。これら舒翁と張翁の二人の老先生は、みんなが惜しんで手放すことのできない金、しかも長い間蓄えてきた金を他人の為に投げ出したので、これは容易に捨てることのできない金を敢えて投げ出したのである。又鎮江の璣翁の如きは老人になっても子供に恵まれず、

近隣の人が若い娘を彼の妾としてさしだした。職翁は心中すでに老いたのに、このような若い娘を娶ることは申し訳がないと思い、その娘を近隣の人に送り返した。これも忍び難いことを能く耐え忍んだということになる。後にこれらの老翁はみな大きな福を受けた。それも彼らの心が正しく他人のできないことを実行したので、天から賜わった福も非常に厚かったのである。財力があり勢力がある人が功徳を立てることは普通の人に比べて容易である。容易であるといって為さなければ、それは自暴自棄ということになる。それに反し、何もない貧しい人が福を為すことは非常に難しい。その難しいことを敢えて為すのは非常に価値があり、貴ぶべきことである。

その縁にしたがって多くの衆人を救うにもその種類は非常に多く、その大綱を要約していっても大体十数種類ある。第一の「人とともに善を為す」とは、他人に一点の善心があれば、その善心を伸ばしてやり、又他人の善事に対してもできるだけ協力して、それを成就させてやることである。第二の「愛敬の心を存す」とは、自分より目上の人に対してはこれを尊敬し、自分より目下の人に対してはこれを愛護して（慈しんで）やることである。第三の「人の美を成す」とは、他人の善事や成功を喜んでそれが成就するように協力してやる。第四の「人に善を為すことを勧める」とは、悪事をやめさせて善事を勧めることである。第五の「人の危急を救

う」とは人が困難や危険に頻した時には進んでこれを救ってやることである。第六の、「大利を興建す」とは人民にとって非常に大きな利益をもたらすことを興し為しとげることである。第七の「財を捨てて福を作す」とは、財を喜捨（寄付）することによって、それだけ福徳を積むことである。第八の「正法を護持する」とは、あたかも仏教の仏法の如く、正しい法を護持することである。第九は、「知恵や経験の豊かな年長者はこれを敬重すること」である。第十の「ものの命を愛惜する」とは、すべての生命あるものは一匹の虫といえどもこれを大事にしてやり、乱りに殺さないことである。

何を指して「人とともに善を為す」というのであろうか。昔、舜は雷沢の湖のほとりで魚をとっている人を見てみるのに、体の頑丈な漁師は水の多く深いところでとっており、また老人や体の弱い人は浅瀬でとっている。水の多く深いところでは魚が多くとれるが、浅瀬では魚がとれない。体の頑健な者がよい場所を占拠して老弱な者は近づくことができなかった。舜はそれを見て心中非常にこれを悲しみ哀れんで、自分自身もこの魚とりをやり、もしよい場所を争って占拠する者があれば、かれらが横暴なる過失を犯してもそれをとがめないようにし、又相互に譲り合う者を見れば、いたるところでこれを賞賛し、これを手本とするようにした。このようにして一年もたつと魚の多くとれる水の深いところを相互に譲りあうようになった。舜ほ

どの徳が高く聡明な者であれば二言三言話すだけでも多くの人に感銘を与えて教化することができるのに、それを言葉を以て教化せず、必ず自分自身の実践行動によって自からが模範を示し教化していった。多くの人はみなそれに感化されて相互に争うことが恥かしくなり、人心が改まったのである。これこそ当に「良工（熟練せる達人）の苦心の存するところ」である。

われわれはこの末世の時代に生をうけて世を渡る上において、もし他人に自分に及ばない短所があっても、決して自分の長所を以って他人の短所を押さえつけることがあってはならない。他人に何か過失があり、不善な事があれば、自己の善をひけらかして他人と比較して得意になるようなことがあってはならない。他人の能力が自分に及ばない場合、自己の能力が多く優れていることを以て他人に堪え難い屈辱を与えてはならない。たとえ自分に才能や知慧があってもそれを内に収めかくしてあらわさず、それはあたかも有っても無きがごとく、実ちていても虚しきがごとくし、また人の過失を見てかばってやるようにする。そのゆえんは一つには自分の過ちを自分で自覚反省させる余裕を与えて気侭な方向に流されないようにするのである。他人に少しでも学ぶべき長所、小さくとも取るべき善行があれば、思い切って自己の我を捨てて相手に従い、その上、相手の為にそれを称賛して広くこれを伝えてやる。すべて日常の間におこる言行において、全く自分自身のために考えるということはせず、すべての多くの人のため

にプラスとなるような言行をする。これが大人の天下を公と為すところの度量である。

「愛敬心を存す」とは、どういうことをいうのであろうか。たとえば、君子と小人を表面的にのみ観察してみた場合、区別がつけにくい。しかし「心を存する」という点になると大きな違いが出てくる。君子は常に善の心を存し、小人は常に悪の心を存するので非常にかけ離れてしまい、あたかも黒と白が相反するようにはっきりと分れてくるのである。それ故に、孟子は、「君子が他の人と相異なるゆえんのものは、君子はその心を存しているからである」といっている。君子がしっかり持っている心とは人を愛する仁の心であり、人を尊敬する礼の心である。思うに人には親しいもの、疎遠なものがあり、身分より高いもの卑いものがあり、また智者、愚者、賢者、不肖者とあって、その種類も千差万別であるが、みないずれも吾が同胞であり、みなわれと一体であるから、誰一人として愛し尊敬しなくてもよいものがあろうか。みな一様に敬愛しなければならない。思うに、衆人（一般の人）を敬愛することは、とりもなおさず、聖人賢者を敬愛することになる。それは昔から聖賢は専ら衆人を敬愛しているが、聖賢の如く一般の人を敬愛するのは、自から聖賢の心に合するので、自から聖賢を愛することになるのである。また「衆人の志に通じるのは聖賢の志に通じることになる」とは、それは何となれば聖賢の志というものは、もともとこの世の中におけるすべての人たちが、相互に敬愛して各自そ

の適所を得て安居楽業（生活が安定して楽しく仕事をすること）して幸福な生活をすることを願っているからであり、衆人の志も同じく安居楽業を願っているからである。したがって自分自身が能く人を愛し、人を敬って世の中の人びとを平安に安んずることは、とりもなおさず衆人の心に合し、聖賢の心にも合し、また聖賢に代って世の中を平安に安んずることになるのである。

「人の美を成す」というのはどのようなことをいうのであろうか。たとえば玉のような美しいものでも、石の中に雑っているとき、これを放っておけば、それはつまらない瓦礫にすぎない。しかしこれを磨き上げれば美しい玉となる。人もそれと同様に、これを正しく善の方向に導いて磨いていけば、凡俗の人もすぐれた人物となるのである。故におよそ人が何か善い事を行うのを見た場合に、またその人の志すところに取るべき善いところがあり、その資質も向上進歩を目指しているのであれば、これを導きたすけて成就させてやるべきである。そのためには称賛して励ましてやり、援助してやり、またもしその人が冤罪（無実の罪）をこうむっているのであればそれをはらしてやり、またその人が非難を受けているのであれば、自分にもその責任があるということで、その過失を軽減してやるので、このようにいろいろと努力して人の難を救い、善を成就させてやるべきである。一体、人というものは自分と同類でないものを憎

むものである（悪人が善人を憎み、小人が君子を憎むが如く）、一つの村落にも善人は少なく、不善人は多いものである。それ故、一つの善事を見れば、人々は寄ってたかってともにこれを非難するものである。したがって善人が世間にあってもまた独力で善を行うことは難しい。その上豪傑の士は性格が剛直で、人並みすぐれているけれども、普通の人と違って外見を飾らず形式に拘わらないので、俗人から見ると、その本心を理解することができず、つねに非難や誤解を招き易い。そのようなわけで、善事は常に敗れやすく、しかも善人は常に非難され、いつも自分を完うすることができない。ただ仁人長者だけは、不正を正しく導き、悪を善に導き、善人を援助し保護して、その功徳は最も大きいのである。

「人に善をなすを勧む」とはどのようなことをいうのであろうか。およそこの世に人として、誰か良心のないものがあろうか。それが世間の名利のためにあくせくとおいまわされて、空しく一生を過ごし、堕落し易いのである。したがって他人とつきあう場合、相手が堕落している場合には、いろいろな方法を講じてその人を教え導き、その迷いから目を覚ましてやるべきである。たとえば非常に長い間、夢を見ていたのを、覚してやるように、たとえば長い間煩悩に陥っているものを救い出して、清浄安穏の境地を覚らせるようにすることである。このような恩恵こそは最も遍ねく、最も広大である。唐の韓退之は、「一時的に人に勧めるには口でもっ

て勧め、百世（永遠に）人に勧めるには書いたもので勧める」といっているが、このことを人と善を為すこととに比較してみると、一方は口頭や書物を以て人に善を勧めるので有形にして形跡を留めるが、一方は実践行動を通じて無言のうちに感化を与えるので無形にして形跡を留めない。そこで口頭や書物を以て勧めるのは表面的、形式的ではあるが、しかし、その人の病気に応じて投薬すればすぐれた効能があるように、両方とも廃することはできないものである。もし善を勧めるにも口頭を以てしてはならない。人に口頭を以てすれば効果がないだけでなく、折角の言葉も無駄となる。これを「言を失する」といい、また善を勧めるべき人と機会にめぐりあっていながら、その機会を逸してしまうことを「人を失う」という。このように言を失し人を失するのは自己の不明によるものであり、それを自らよろしく反省すべきである。

「人の危急を救う」というのはいかなることをいうのであろうか。一体、困難にあったり、不遇な目にあったりすることは、人間として常にあることである。もし、そのような人にめぐりあったならば、人の苦痛といえども自分の一身上の病苦と同様に速やかにそれを解き、救ってやらなければならない。あるいは悩み苦しんでいる場合には、言葉によってそのふさいだ気持を開き伸ばしてやり、あるいは困難に遭遇している場合には、いろいろと手を尽くして救ってやらなければならない。崔先生がいわれるには、「恩恵というものは大きいことが善いので

はなくて、他人の困ったときに早速駆けつけてやればよいのである」と。まことに仁者の言葉である。

「大利を興建する」とはどのようなことをいうのであろうか。それは小にして一村のうち、大にしては一県一国の中で、およそ人の利益となることができるものがあったならば、全力を尽くして興すべきである。それには、或いは渠を掘って水利をよくして旱害の時の備えにし、或いは堤防を築いて水害を防ぎ、或いは橋や道路を修理して旅行者の便利をはかり、或いは茶飯を施して、のどの渇いたものをいやしてやり、飢に苦しんでいるものを救ってやるなど、縁にしたがって勧めたり、導いたりしてやり、金のある人は金を、力のある人は力を出し、みんなと力を合わせて適切に実行することである。そのために他人から悪口をいわれようとも自分が公明正大であれば何も恐れ避けることはない。そのために身の苦労をいとったり、人から怨まれることを恐れてはならない。ただ一途に人のためになることは、これを行うべきである。

「財を捨て福をなす」ということはいかなることをいうのであろうか。それは仏教にはいろいろな多くの善行があるが、その中でも布施の行が第一番に大切なことである。いわゆる布施とは、ただ「捨」の一字に帰するのである。それは惜しみなく喜捨することであって、仏法に達した人は、内はわが身の六根（人の惑いを生ずる六つの根源、眼耳鼻舌心意）をも捨て去り、

外は心性を汚す六塵（色声香味触法）を捨て去り、すべて一切のものを捨て去るのである。それにはまずお金から布施をなすことである。世上の人というものは、衣食を以て生命としている故に、その衣食を得るお金や財を最も大事にするものである。その大事なものを自分から捨て去るのは、内は自分の惜しみ貪る気持も放棄することができ、外は人の急を救ってやることができる。このことは始めは無理してでも努めてやらなければならないが、終にはそれが自然になって容易にできるようになる。このようにしていくと最も私情を洗い浄め、物に執着し惜しむ心を除去することができるのである。

「正法を護持する」とはどのようなことをいうのであろうか。法とは万世にわたって正しい道を歩むように導いてくれる人の眼目のように最も大切なものである。この正法がなかったならば、われわれはどうして天地化育に参じ、たすけることができようか。どうして万物それぞれがその所を得られるようにすることができようか。どうしてこの世の塵俗をぬけ出し、世間の束縛から解き放たれることができようか。どうして世を治め俗界から超然としていることができようか。したがっておよそ聖人賢者を祭っている霊廟（寺）とか、聖賢の書いた書物などを見れば、それは当に正法を教えた人を祠り、正法を伝えているものがあるから、みな尊敬重

視してこれを修理補正し、整理して、正法を伝えひろめることをはからねばならぬ。正法を発揚し、上は仏恩に報いることができるよう、一層の勉励努力をしなければならない。

「年長者を敬重する」とはいかなることをいうのかというと、これは、家に在っては父兄、国においては君主を始めとし、およそ年老いたるもの、徳の高いもの、位の高いもの学識の高いものなど、みな心をつくして仕えるべきである。家に在って父母の側に仕える場合には、深く親をいたわり、態度をやさしくし、声を和らげ気を平にして接するように常に気を付ければ、その習慣がやがて自然に本性となって、そのやさしい和気こそが天の心を感動させる根本となるのである。外に出て君につかえる場合、いかなる仕事を為すにあたっても、主君が知らないからといって、自分勝手にほしいままに行なってはいけない。またいかなる人を罰する場合にも、主君が見ていないからといって威張りちらしてはいけない。主君に仕えることは天に仕えるようにつねに恭敬の心を持ってするので、これは古人の正論であり、このようなことは最も陰徳に関係の深いことである。試みに忠孝の家についてみれば、その子孫が長く続いて繁栄していないものはない。このように見てみればよくよく慎しみ勉めなければならない。

いかなることを「物の命を愛惜する」というのであろうか。およそ人間が人間として価値があるのは、ただこの物を憐れみいたわる惻隠（そくいん）の心があるからで、孟子も惻隠（そくいん）の心がないものは

人ではないといっている。故に仁を求めるものはこの惻隠の心を求め、徳を積むものはこの惻隠の心を積むのである。そこで惻隠の心がなければ仁を求めることも徳を積むこともできないのである。周代の礼に「正月には祭祠に供える犠牲に牝を用いてはいけない。」とある。正月というのは各種の生物が成長する時機であり、畜生もこの時機に懐妊するので牝を犠牲に供してはいけないといわれる。孟子は、「君子は庖厨を遠ざける」といっている。これらはみなわが惻隠の心を損なわずに全うさせようとするわけである。それ故に先人に、「四不食の戒」というものがある。それは、

一、殺す時の鳴声を聞いてはその肉を食わない

一、殺す時の様子を見てはその肉を食わない

一、自分で飼ったものは殺して食わない

一、自分のために殺したものは食わない（御馳走の為など）

以上四つの戒めをいうのである。これらは自分の惻隠の心に触れるので忍びないのである。そこで学問をする者が未だ肉食を断つことができなければ、まずこの四戒を守ることから始めて、段々と徐々に精進して行くべきである。

このようにして慈悲の心がますます成長してくれば、ただ殺生を戒めるばかりでなく、うご

めいている虫けらであろうと霊性を備えた人間であろうと、みな同じく天から与えられた生命である。そこで乱りにそれらの生命を傷なうことのないようにするのである。たとえ衣類を作る生糸（絹糸）をとるためにも繭を煮てどれだけ多くの蚕の生命を傷なっているであろうか。また田畑を耕して農作物を作るにしても、どれだけ多くの生物の生命を害しているであろうか。このように吾人の衣類にしても、食物にしてもみな他の生物の犠牲の上に我々は生を養って生きているのである。故に物を粗末にして愛惜しない罪は殺生の罪に相等するのである。たとえ殺生の気がなくても、時には不注意のため手の触れる所、足の踏む所、どれだけ多くの生命を傷なっているかわからない。したがってそういうことのないように細心の注意をはらって防止すべきである。昔の詩にも鼠が餓死しないように常に食べ物を残してやり、蛾が燈火に飛んで来て焼死しないように燈火をつけないで消しておくとあるが、これは何と慈悲心の厚いことであろうか。善行は窮りないものであって、すべてを述べ尽くすことはできない。しかしここに挙げた十箇条のことから広く推しひろめていったならば、そのときは万徳（あらゆるすべての徳）を備えることができるのである。

（五）譲徳の効果

『易経』の「謙」の卦でいうには「天の道は十分に盈ち満ちているものを欠き損らして、謙にして足りないものに補い益し、地の道も同じく、十分に盈ちているものを変化させて、その余分なものは足りないものの方に流れて行き、鬼神は十分に満ちているものには禍を降し、謙にして足りない者には福を与える。人の道は十分に満ち足りて得意になっているものを悪んで謙虚なる者を好むのである」と。このように天の道も、地の道も、人の道も皆盈つるを悪んで謙を好むのである。それ故に、六十四卦の中で謙の一卦だけが六爻ともみな吉である。また『書経』に「満は損を招き、謙は益を受く（自ら満足して得意になっていると損を招き、謙虚であれば益を受ける）」といっている。私はたびたび諸君と一緒に試験を受けたことがあるので感ずるのであるが、貧乏書生で科挙の試験に合格して立身出世をするような者は、必ず謙虚で奥ゆかしい態度を持していたのである。　辛未の年、受験の為上京した時、私と共に同郷の嘉善から上京した友人が十人ほどいたが、その中で丁敬宇が最も年少で、非常に謙虚であった。そこで私は友人の費錦坡に告げて「この人は今年科挙の試験に必ず及第するだろう」というと、費は「どうしてそれがわかるか」と問い返してきた。それに答えて私は「ただ謙虚な者だけが福

を受けることができる。君よ、受験生十人を見てみたまえ。誠実でつつしみ深く、人と先を争うことなくおだやかなこと、敬宇のようなものがいるであろうか。恭しくつつしみ、素直で、細かく気を使い、ひかえ目にしていること敬宇のようなものがいるであろうか。人から侮りを受けても報復しようとせず、人から悪口をいわれ謗られても弁解をしないこと敬宇のようなものがいるであろうか。人がこのような態度であったならば、たとえ天地鬼神といえどもこれを加護しようとするであろう」といった。発表の結果は、はたして予想にたがわず合格したのである。

丁丑の年、私はちょうど京にいて馮開之と一緒だった。そのころ彼は、己を謙虚にしてつつしみ深く、大いに幼年時代の悪習を一変し、傲慢な様子がすっかりなくなっているのを見たのである。また李霽巌は、正直にして誠実な有益な友人であった。時には彼に対し面と向って誤りを攻めたてても、ただ心を平静にして素直にこれを受け入れ、いまだかつて一言の口答えもしたことがなかった。私はこの友に「幸福になるには、その幸福の始めになる根源があり、禍災に逢うには、その禍災の前兆となるきざしがあるものである。それと同様に自分の心がはたして謙虚であれば、天は必ず加護して助けてくれる。すなわち謙虚は天の加護を得る前兆だからである。謙虚な君は今年必ず試験に及第するに違いない」といったが、はたしてその通りで

あった。

趙裕峯光遠は山東冠県の人である。若いときに郷試に合格したが、その後、長い間上級の試験に合格しなかった。その父が嘉善の主簿となったので、父に随って役所に行き、銭明吾先生を慕って、自分で作った文章を持参して見てもらった。ところが明吾先生はその文章をことごとく書きかえて改めてしまった。それを趙光遠はおこらぬばかりか、かえって心から服して早速添削の通りに改めた。このように謙虚であったから、その翌年にはついに及第した。

壬辰の歳、私が参内して天子に謁見した際、夏建所に出会ったが、彼は少しも驕った様子がなく、非常に謙虚であり、その様子が態度ににじみでていた。私は感心して、帰宅してから友人にそのことを告げ「およそ、天がこの人を出世させようとするときには、まだ幸福を与えない前に、まずその人の心の智慧をひらくものである。この智慧の心が一度ひらけば、心の浮ついているのも着実になり、いままで自由勝手な振る舞いをしているものも、心をひきしめて慎み深くなるものである。ましてや建所はあのように温良であるから、天は建所の運をひらくにちがいない」といったが、はたして試験発表の結果及第したのである。

江陰の張畏岩は、長い間学問を修め文章を作ることが上手であって、学者の間でもひときわ名声が高かった。甲午の歳、南京の郷試のときに、ある寺に宿をとっていた。やがて試験も終

り、発表を見ると落第していた。自己の学問や文章に非常に自信を持っていただけに、試験官には見る目がないといって大いに罵倒した。そのとき一人の道者（徳の高い修道者）が側にいてにやにやと笑っていた。これを見て張畏岩は急にその怒りを道者の方に向けて「お前はどうしてわしを笑うのか」と叱りつけた。すると道者がいうには「あなたの文章を判断してみると、必ずよくないと思う」と。張畏岩は益々怒っていうには「お前は、まだわしの文章を見ていないのに、それがどうしてよくないということがわかるのか」と。道者が答えていうには「私は『文章を作るには心気がおだやかで平静なのを貴ぶ』ということを聞いているが、いまあなたが試験官を罵倒する言葉をきくと、どうもあなたは平静を失って心中甚だ不平のようです。それでどうして優れた文章が書けましょうか」といった。張畏岩は、はっと驚き思わず平伏し、道者について教えを請うた。

さて道者がいうには「運命がもし試験にうかる運命ならば、文章が上手でなくともやはり及第する。運命がもし及第すべき運命でなかったならば、いくら文章が上手でも、何もならない、無益なことである。それ故、真に試験に及第したければ、自分の運命の転換をはかってこそ始めて可能なのである」と。そこで張畏岩はまた質問した。「運命がすでに及第する運命にあたっていないならばいかんともしようがない。どうしたなら運命を転換できるのであろうか」と。

道者は答えて「運命を主るものは天であり、運命を作り上げるのは自分である。それ故善事を一生懸命に行ない、広く陰徳を積み、その上さらに謙虚になり、謹み深くして天より善い運命を受けるならば、如何なる幸福も求め得られないことはないのである」と、運命の開拓法を説いてくれた。そこでまた張畏岩は「御教示はありがたいが、私は貧乏書生であるので、いかにしたら銭を得て善事を行ない陰徳の功を積むことができるだろうか」と。道者はさらに答えていうには「善事や陰徳の功というものは、みな心によって作り上げるものである。故に常に心をその善事陰徳の上に寄せるならば、その功徳は無量無偏にして非常に大きいのである。かつ謙虚の一字のごときは、自分でやろうと思えば一銭の銭も使わずにできるのである。それなのにあなたはどうして自ら反省せずに試験官を罵倒するのか」と懇切に諭された。

張畏岩はこのことによって、すっかり感じ悟って、我見を折り、自らよく節操を守り、善事を日々に修めてゆき、徳行は日に日に厚さを増していった。丁酉の歳のある夜の夢に高い建物の一室に入って行った。そこで一冊の試験の帳簿を見つけたので、それをひらいて見ると、何も書いていない空白の行が多かった。そこで変に感じたので、傍にいた人に尋ねて、「これは今年の登庸試験で合格した者の帳簿であるが、どうしてこのように多く名が欠けているのだろうか」というと、その人が言うには「登庸試験は天界で三年に一度考査（調査）される。そこ

で徳を積み咎めのない者があると、はじめてこの帳簿に名を書き入れるのでそれによって試験に合格できるのである。前の空白で欠けているところは、みな以前には試験に及第させるはずであったけれども、後に徳を汚すような行いがあったので、名を削りとられたのである」と。そこでまた最後の一行を指して「あなたは、この三年以来、大変操行を慎んできた。よってここにあなたの名が書きこまれるかも知れない。大いに自重自愛しなさい」といった。さて、この度の試験に彼は百五番で及第したが、これは、その夢の中で指したところの番にあたっていた。このことで考えてみると、我々の頭上三尺のところには、必ず神が我々を照覧しているのである。

吉に趨き、凶を避けるのは、すべてが自分自身による。わが心を正しく保ち、善事を行なって悪業をしないように自分を制して、少しも天地鬼神に罪を得ないように己の心を謙虚にし、へり下って、常に天地鬼神から憐れみをこうむるようにして、はじめてどうにか福をうける基ができるのである。傲慢の気が充満して威張っている人は、必ず遠大なる器量がないのである。それではたとえ一時的に発展しても、長期にわたってその福を享受することができないのである。

少しでも見識のある人は、自分の本来の広い度量を自ら狭くしたり、自分で得られるところ

の福を自ら拒絶することはしないのである。ましてや謙虚な人は他よりいろいろといたるところで指導や善言を受け入れることができる。そこで無限の善（福徳）を得ることができるのである。これはとりわけ修道者にとって欠くことのできない最も大切なことである。

古語にも、「功名に志のあるものは必ず功名が得られ、富貴を得ようと志すものは必ず富貴が得られる」といっている。このように、人が志をもっているのは、樹に根があるようなものである。匹夫の志は三軍の力をもっても奪うことはできない。このようにしっかりとした志を確立して、しかも、いつも謙虚であり、いつも機に臨んで小さくとも善根を積み、自然のうちに天地鬼神を感動させて、運命を自ら造って行くようにすべきである。ところが今日、官吏登庸試験に及第しようとするものは、始めから確乎不動の志がなく、一時の興味で受験するにすぎない。それ故興がのれば受験し、興がさめれば止めてしまう。孟子が「王がほんとうに音楽（調和）を好んだならば、斉国は平和に治まるに近いであろう」といったが、私は科挙の試験においても善徳を積めば合格することができるのである。今後、科挙の試験を受ける人が、善徳を積むことによって試験に受かるということがわかれば、皆なが自然に善徳を重視するようになる、そうすることによって世の中が平和に治まってくるのである。これらはみな、同じことをいっているのである。

（終り）

平成十一年一月一日発行
道慈研修資料第三集
「陰徳を積む」
編集翻訳　東京総院道慈宣闡委員会
発行者　社団法人　日本紅卍字会
東京都中央区銀座五ノ九ノ十二
ダイヤモンドビル三階
電話　〇三―三五七二―八二四三